特18
245
No10998

東京帝國大學圖書館藏

耶蘇降世一千八百八十八年

サベツ小傳

全

明治二十一年

米國聖教書類會社

明治・文内・十二

第一章

牛乳屋ウオルブリッジ某の女子エリザベツの小傳

神れ眞實の子等れ身にあらはるゝ神れ恩惠の働を尋ね明むる事い誠に樂き業ありけり殊に去ることく貧き人の心ゐ神の恩の光り輝きて神の靈の印去たるキリストれ像に明証をゐすを見るは眞に悅ぶしき事ゐゑある富貴の人は屢種々れ妨礙により て神の道に遠のるゆゑとあるゆゑとある者ゐれとも貧賤の人い斯る障もあらざれバキリスト信徒の本色を保つゐとも容易ゐり去のれとも富る人貴き人い神の國ゐいるゐ種々の妨碍ゐりと然なゆゑ富貴れ人ゐして能く其驕傲我慢をすて世の毀譽にひかさて心貧しく柔和謙遜にして義を慕ふ者往々あるは如何に幸ゐることゐらずや是皆神の御恩ゐして甚ゐりゲたき事ゐりけり

然はわれとも教の本色を見んには身の貧しくして信仰の富る者なる貧賤の人れ中に就て視るべきあり貧人の草れ庵い屢神れ宮殿とあれるあとあり嗚呼ありがたき事あるかあ誠わ世には貧人れ草舎わ就て信仰と希望れ貴き教を受々神の智慧と恢能と恩惠の働を認る者多し偖此小傳わしるそ事は皆實事にわして決して造事にはあらず余が此女子を知るに至しと左の書翰を受てよりあり即ち是はエリザベッが始て余におくりし者あり其文わ曰く

拜啓未だ一度も謦欵わ接してとあらず突然と申しわぐるい憚りあきにあらねとも怒して聽たまへ婢骨て一度某の處わて御説教を聽聞いたし候間下い神わ忠義ある説教者わまして罪人をすくめて神の罰をのがれさせたまふ甚も貴き

力と信じ候なり凡て罪の中わ居り悔改めずして死もれい皆神の怒にわはねをあらず如何におろろしき事あらずや請ふ主の力をたのみて働きたまへ願くは神君を惠て君の愛の働に效驗あらしめ多の人をして救拯をのうむらしめたまへ主キリストい其召て遣したまふ人とともにいましして世の終まで之をしあれずと宣ひしわあらずや請ふはげしたまへ婢はかの義勇兵の一人が閣下れ愛を蒙りたるを見て大わ喜び候是必ずキリストの愛れ閣下を彼人に遣したまひしあり願くいの愛心恒に君の中にあり離ざき婢い君がキリストれため熱心に働きて迷へる者を救はれんおとを切わ望み候願くい聖靈閣下れ言につきろへて聽聞人をして利益を蒙らしめたまいんてとを願くい多くの人キリストわしたがひて新き者

とゐるに至んてとを請ふ君罪人を悔改めさせんために熱心に神に祈たまへ神の力い大なり誰り之に當るをゝん神い其御子れ名をもて來る信仰の祈を聽くと約したまふ「汝等求めよ然らば授らん」とあり我等之によりて大に力をえて祈り求むるあり嗚呼希望い樂き者なるかな神の御約束を思ひ見れば心もひきたちて勇しくゐるがゝしキリストと其復生の力を心わゐるは如何に樂き事あらずやキリストを信じて我等い希望をもて喜び天下れ人ゞ皆主をありて之を畏るゝにいたるれ時の臨むを俟あり

キリストの國の來らん時い如何わ幸あらんゝ其時にいキリストの御心天に行いるゝごとく地にれゐゐれん又人い皆キリストれ愛れ「マナ」を食ひ終日主とともに樂まん斯る時い

てれちわ樂園のいできたるあり婢い今よりして神とキリストの榮光のために力をつくさんとて勇を進めて事をなし候婢ゝ會堂へまゐるゝとを得ずして日曜日に此書を書いとめ候私の只一人の妹は某の家わ奉公をしゞ病にあり候わ何きて婢此わ來りて其代につとめ旁看病いたし候然るに妹い今い早彼世の人と相あり候婢い君に請ふて妹に書を送りたまえんてとを求めんと致し候彼い其身の往にし行爲の惡ゝりしを曉り頻わ神の赦恕を願へり是によりて彼い救れて天わのぼりしあらんと思ひて心を慰め候「主わをりて死たる者い幸あり」といふを えゝ悅たしく候なり彼い主の晩饗を受主れ死と苦難をおぼえんてとを願たり婢力れおよぶだけ彼にをしへてキリストを心にうくる事の意味をさらせ候然と

身體の弱るに及びて彼再其事をのべざりき但し死ぬるまへに十分に覺悟したるやうに相見え候今は天國にをらんか然らば誠に幸に候

斯賤き物ゑらぬ身をもて憚もせで彼是と申しあげ候へども御咎なく憐をて御労書を下され及ばぬ婢をおしへたまへる妹は死る時わ闇下れ手により葬られんゐとを望む由を申し候婢れ家れ屬する寺領の牧師い差閊ありて其葬式にのゞむ能いずと申し候妹い某の地わ葬らるべく候あり彼い火曜日に逝世り候金曜日か土曜日れ午後三時わ葬式をいださんと存ず君の都合わまかせんのを此願を聽とゞけたまふや否や使者に人の返事をたまわりたく候うしく

エリザベツ、ウオルプリヨ

我此書翰をみて其衷情の懇切なると熱心の厚きとを感歎せり其文は拙くして文字のあやまり多うり志ゞ是にて彼ゞ身分賤く貧しくして信心の高く秀たる者なるゐと解りたれど却て彼の人とゐりを慕しく思ふにいたれり余此書を得たるを喜べり殊にまた是る熱心の者其邊に多く見えざりゑかゞ別ても之をよろこびおもへり是につけても書面のやりとりの益あること明らかのゐり余い斯人ゞゞ書面をとりやりゑて其身を益せんゐとを望む夫信心深き貧人と書面わて交り或い面をわいせて語りあふい心をはげまそのー助にて牧師たる者役者たる者等い是によりて人を教ふるの道をまゐふ事多し」茲に我書面を讀おいりて其使者い誰なるかと尋ねたる「門の外に待をるといふによりて乃ち出て之を見るわ頭い雪うと思ふぞのりに白く顔にい

皺の波をうたせたる老人ありけり彼門によりかゝり涙をなが
してありしが余のいたるを見て恭しく禮をなして然て言ふや
う「僕女子の書翰を君の許にもち來り候斯く賤き身にて斯る事
を願へゞ定めて身を忘らぬ奴と御おもひもあらんと推し候」と
いふを聽て余答へけらく否とよ老人然れあらず若其事ゞ御前
の屬そる教會の牧師に對して不敬とあるてとあくを余れ喜ん
で之をなしてさしあげん」老人曰く「奴の教會の牧師れ二三里先
に住れるふがうへわ彼日にれ據なき用事あれば誰ゞ外に其事
をとりれあふ者あらゞ願ふとあるとありと昨の日申され候因て
女子わ談じたるわ閣下に願へとて彼書翰を認め候委細は書中
に相見え候あり」余乃ち老人を家に導きいれて偖て問ひけるや
う「御身の職業は何わて候や」老人答ふ「僕れ是より三里をゝりな

る某の地の草舍わ年久く住をる者なり少の土地をゝりうけて
牝牛を養ひ乳をとりて其を度生の助にいたしをり候」余問ふ「御
身の家族れ幾人なるや」答ふ「老妻たる一人の妻と男子二人女子
一人てれあり候今一人の女子は只今みまゝりて候」余ろの言を
ついで言ふ「意ふに天國にたびたゞれつらん」老人いふ「僕もかく
てろ望み候らへ彼子れ姉のごとくれ善き道わすゝまざり走ろ
と姉の勸わよりて救れしあらんと存じ候吾ゞ此女子のおとき
子をもつれ幸わ候娘ゞ勸るまでれ僕れ靈魂の事ゞとれ然のみ
考へずわをり候」余問ふ「御身れ何歳にあらるゝや」老人いふ「七十
歳にちろく候吾ゞ妻は尚年よりて罷りあり我等れともわ老ぼ
れて職業もあらぬ身わ候ゞ娘奉公先より下り來て孝養いたし
くを候誠に稀なる娘に候あり」余答ふ「御娘子れ始終然ありあや」

老人答ふ「否さらず彼れ其若かりし時は世の樂や衣服や遊戯に耽りたる者なり誠ふ僕一家の皆物さらずふて常ふ思ひたるに若此世の度世を謹みて人ふ損害を蒙せずば必ず天國に入をえんと存じ居り候ひしあり吾が娘等も我等のごとく神をさらぬ者ふて世の欲ふひのされたる者なりさが其二人の中長女れ奉公にまかりいでたる先方にて一日某の會堂にて說教を承れり其時より去て全で變りたる者とふひあり候聞に其時教をとられたる者は牧師となりて殖民地へ赴らるゝ御方なりさとい ふ彼時より去て娘れ聖書をよむことを始め其行正しく相あり候彼始て歸宅にさがりまゐりさ時五圓の金貨をもち來りて是れ給金の中よりのこし書へたる者あり年老ませを定て御用の事あらんとて我等夫婦ふ交し候且彼申し候には衣服ふ金を費すことれ外見をかざる愚事あるべ重て以前のごとく之がために心を勞せず寧金子をもて父母の恩をむくゆる一端ふ供せん

キリスト少女ふ恩をほどこしたまひたれば少女も斯せんことを願ふと申し候我等是をきいて大ふ感じ彼とともふをるを悅び候誠ふ彼の氣質と行爲やさしく去て以前とれ天地の變易あり彼は我等の身体と靈魂ふともふ益をあさんと心がけて親切に世話を致し候是ふよりて我等も斯る不思議をおこす敎なら必ず倚べき者あらんとおもひつきて其より敎をきくに至り候然るふ彼の妹は常に之を笑ひあざけりて姉の頭れ其新規の思ともふ餘處に向きたり等いひしが姉れ答へて否わが頭ふれあらずわが心れ罪を好むことをやめて神を愛するの方ふ轉きたり願くれ御手前もわが如く一日今の身の危きことを知

るゝゐいたらんてとをと申し候妹い是をきよて我ゐ姉の説教をきくを好まず我い他の人よりも悪きにあらざれば是わて足りと應へ候わ姉のエリザベッと之ゐつげて妹よ御手前仮令わゞ説教をきのぬとも我い汝れために熱心に神に祈るべし爭か汝てれを止めえんと申し諭したりしゞ此祈い聽きたりと見え候妹ゞ病に臥たる時エリザベッ彼ゞ主人の家に往て其うれゐ働き且看病して彼ゞ靈魂の救の事をゞたりきのせたるに妹も曉る所ありしと見えて大に以前の罪をくひ姉れ親切を謝び救拯の道ふたとりいると語し候よし承れり候我等夫婦ゞ見舞ふゆきし時に彼其以前れ罪わ恥ち且之ゞために憂ふる由を言ひ姉れ救主ゞ己にも救主とるりたまとんてとを信ずと陳べ候是全く其身れ罪を見其身のいうゐきを觀りたるものにて斯

彼キリストに只管に賴ミ候ゐんゐ彼娘今い世をさり候ゞ僕いエリザベッゞ彼を神わかへら志めんと祈たる事の聽れたるゐらんとおもひ候」と斯語り出たりけり此談話によりて彼書の事も明のわわのりたれば我い悅びて其願を容をエリザベッに懇意ゐゐらんと望をたり是ゐよりて金曜日にゆゝんみとを約し尙志ばらく其老人の今れ心の如何ゐるを尋て之をゐへしやりぬ彼老翁は顏は皺ふかく髮と雪をあざむき目い涕ぐみ脊いかゝと其歩行もたゝのゐらず後々と杖によりて進みゆきたり吾之を見て種々れ考をおてしたり志ゞ今わ尙悅びて其事屬心に思ひ出をなり斯て金曜日にあり志のべ時刻をたゞへず會堂ゐいたりしゞ暫時ありて葬送れ者會堂の門前わすゝを來りぬれば余出て之を迎ふるわ老邁たる兩親と長子と姉わ親類の者拱哀

傷の様子にて棺を送り來れり其中彼余ゐ書を送りたる女子い殊ゐ信心ぶかき謙遜ある態ゐて余をを去て一層感をおみさゑめたり斯て余墓場にゆきて葬式の文を讀たるゞ玆ゐ一の有難き事ゐろれおりたを其事ゐよりて益々わゞ教會れ祈禱文れ尊きを知るにいたる其い別事ゐらず葬送ゐ隨ひ來りし其村の人一人大に感化せられたる事ゐりゞ此人い素より放蕩ゐる者るりしゞ此度葬式を見んとて隨ひ來り墓場まで俱ゐもきたり然るに其人わゞ祈禱文を讀むを聽て大ゐ感じ已の罪をゝとめて終に悔いあらためたり彼此後全たく變りたる人となりて常ゐ此時の祈禱文の事を言ひいだせり誠に幸の事なりゞ故ゐ此日い永く心におぼゆべき日ゐして凡て「貧人の簡短ゐる傳記」を學んとする者の心に誌すべき日にゐんゐりゞる斯く此日ゐエ

リザベッの如き謹ふかき者と彼村人のごとき考ゐき者とゞ一墓におちゐひしい深き故ある事にして偶然れ事ゐいゐらじゐし皆是神れ導ゐり然ゞ神れ導ゐ志たゞいぬ人ゐい幾何の損失あらんゐ思ひやられて恐ろしゐりけり

斯で葬式もすみしかゞ暫く老翁媼と女子とに談話をゐして返りぬ其時エリザベッい其死去たる妹れ仕し家ゐゆきて之ゞかいりの來るまで尚一二週間をらんとする由をのべて而ていひけるやう婢い彼處ゐてうまたは家ゐゐへりたる後父の家ゐて閣下とゐもゐ此妹れ事を打語いんてとを願ふ」といひけゝば復遠ゐらずゐいんと約して去り途すゞら此葬式の事を彼此考へみて家に還り貧き者を憐みたまふ神を讃め貧き者ゞ信仰ゐ富み富る者ゞ心の貧くゐらんてとを祈れり

第二章

抑れのれが交はりたる友の既に死去たるときにおよびて其昔の交際を思ひ出せば屢心に喜をおぼゆることある者あり若其友が神を信じて世を渡りて終に寢りたる者あらむ此心如何ぞかり大あちんの天國あいたりて絶間あき幸福を蒙りをるあらんと思ゆる人と昔交いりたりし其時の模樣や談話を思ひ出る時は哀きが中に喜の心れありて彼大復生の日の事の思ひやられて樂しくあるものなり彼日あい皆主の榮光をうけりて復と離るふことあきにいたらんとおもへば此事を望むあとのいやましして勵む氣のれてるも理あり是世にある間の貧富は物の數あらずろの貴む所い皆神あありて王とあり祭司と

あるに在りとす是眞の貴き者なり牛乳屋の娘エリザベツも終わ彼世れ人とありしが是も亦主あありて死たる者にてありき其事い後あいたりて知るべし

偖葬送れ後七日ばありありて余エリザベツが仕へをる家を訪んとて往り其家いエリザベツの妹が前あ仕へあて死たる家あて今エリザベツろの代わ此わをる玆わ其家を見わたすに誠わ宏壯ある館にして山の麓なる美しき平地わ高く聳えたり其四周には何處にも樹木生ひ茂りて其景色誠に幽あり一目して其遺緒あるものあるを知るべし其家の作の古風なる格子扉や屋根の尖等にて玆るし又家屋い一方わは長春籐稠くはびてり て烟突の端まであらみのぼれり彼といひ此といひ皆古時を思ひいださむるに足る玆わ歩をもゝめて近より見れば又年代

の過ぎく樣ゝ思ひ出らる昔より生れては死ゐ來てゝ往くゝ人の常あり滅に天地ゝ逝旅にして人ゝ客ありといふべしダビデ一時此事を考て言たることあり（其言ゝ詩篇第三十九篇に見ゆ）云く「神ゝ吾命の日を手寬のごとくに定めたまふ神より見ろなはせゐ吾年紀ゝ何もあきゞ如し眞ゐ人は皆其完かる時ゐも尙虛き者ある而己實に人ゝ徒ゐ勞するのみ自ら財寶を積と云とも其寶れ誰に歸そるを知ざるゐり」若富る者其所有の定あきを思ひ此世の物の常なきを了ちゞ如何に幸あらん歟富人ゝ其家ゝ萬世までも斯てあらんと思ひ已の名を其土地ゐゐづゝ等す然ども人れ榮は限あり人は滅び失る獸のごとくあるゞゝし然ゞ其斯あすゝ愚事れみ然るゐ子孫たる者其言句を善とするゝ如何ゞや斯人等も羊のおとく墓に

臥ゐ死れためゐ滅され其美は家をとゐれて墓に消べし

斯て家にゝりて主人等と暫く談話したるゞ其話れ中にエリザベッゞ妹の看病意ゐゐかりしてとの物語りを聽且其行れよきを語らるゐをきゐて大ゐよろてべり拔ゐ嘗て、葬式の時ゐなしたる約束をふまんとて主人れ許を請てエリザベッゐ面會するエリザベッゝ喪の衣を着てをり其心の恬惰ゐるゐと顏にわられて誠に感心にたへざりきエリザベッ乃ち語りいでゐ其妹ゞ死るまへに心をあらためて神にゐたゞひたる模樣ゐと談しけり彼ゞ勸と祈の效驗によりて斯幸ゐる結果れ生じたるは誠ゐはろゐべし余ゝ彼ゞ其事を語る樣の甚殊勝なるに感じて眞にかれゝ清き敬の感化を蒙むりをるゐりと思ひたりき彼此後志ゞ〳〵敬の事につきて余の勸をえんことを願ひ且主ゞ萬事

を主とりて善おすゝませたまふおとを望む趣を陳べ其妹の死よりして余おちうづきにありし事の終に已と其父母の現世未來の益とおるにいたらんことを冀ふ旨を告たり彼い奉公の身なれば長話はようらずと思ひたまべ遠からず其親等を訪んといひて別れんとせおうた彼言けらく「閣下よ君い富る人と交ることを楽て辱おくも貧き者と語りたまふ是まことに有難し婢今そおし婢の心の中を語りまゐらせたく願ひ候併しおゞら後に御目にかゝる時申しあぐる方よろらんと存じ候今度御訪くださる時い婢い斯る宏壮おる家にいをらず卑き小屋お罷りわるべし然なゞら其處おをるい斯上もおく幸にさうろふおり願くい神の恩君ゞ御身おあまねく及ばんことを」と斯なん言たりける余是等の言をきゝて大いお満足に思ひ斯る人と近づきに

なりしを喜おびて其所をたちいでぬ誠にエリザベツの心い理に通じ信仰にとめる者とおるもいをたり是おつきて貴き人ゞ賤き者と敬の上の交際をおすゞためお大おある利益をうゝむるお至るべきことも思ひおらきたり夫「神い智者をはづうしめんと世のおろうなる者をえらびて強き者をえづのおめんとて世の弱きものをえらびたまふ又神も有ものをはろぼさんとて世の賤きもの輕めらるゝ者すおはち無ゞでときもれをえらびたまふ是凡の人神のまへお誇るゝおとおるうちんためおり

（コリント前書一章二十七己下を見よ）我此事屢世おれてるおり

い何の考ふる事おる時は屢景色れ美き場所にもきて美景をなゞめおゞら考をおすおとおありければ是時も歸途の彼館の邊おる小山の巓おのぼりぬ此お海の標柱おり其形三行塔にして石

あり余其評に坐りて四方八方の景色をあがむるに其美麗いんりたるし南にハ六里ばうりをへだてゝ山の峯嶺長く渉り西れ方なる山々ゝ連なりて中に膏腴の平地を包む其平地にハ麥田と牧場一面にあまねし余ダ上りたる山ハ此南と西の山々の間にあり是平地に小川ありて此ゐまゞり彼ゐくねりて數里ダ程あゞをわたり其河岸ゐハ衆多れ羊草食をる又此所彼所に小高き岡ありて其上ゐハ樹木の生ひ茂げりたるあり麥や草の生じたるあり稀にハ灌木や嫩れ生ひたるもあり其一の岡の上に會堂たちをりて一層景色れ美を添ふ平地の中央にたてる小山の上に備弟の大木あり甚だ老き樹ゐして唯に往來れ人をして之をのへりみゐむるのみあらず亦導船人の漂木とありて安然に港ゐいるをゐせしむ又平地の面にハ所々に村々農家弟屋別

莊會堂等許多たてる見ゆゐダ坐したる山の此方みハ是日わダ訪ねたる彼館見えて其家の樹木ど園の有樣美しく目ざましうり茲に東南をのゑむゐ邊際ゐき洋海茫洋として日れ光其波を照し輝光まゐとに燦爛たり又北に於てハ海の濶一里より三里までの間ゐ出入して大河のごとくゐ見ゆ卽ち對ふの海岸と余ダ居る此ツイル島の間にはさまれて斯見ゆるゐり余ダ坐を直下は樹木の生ひ茂げりたる美しき地方ゐり對ふの海岸の町々はかすゐに見えたり許多の船錨をおろして泊をるも見も誠に言ふにいハれぬ佳景ゐりけり又西の方ゐは山々ゝ相隨ひて海の波うつ樣に似たり此山々ゝ南ゐ渉りて彼の平地を限る是等の山ハ多くハ其頂上まで開墾したる者ゐて麥等澤山に其上に見うけられたり其中ゐる最高き山にハをりふし雲少しのより

居て善は見えざりあゞ其うへわたてる燈明臺と古寺のごとき者のすのに目にうつり來れり斯べのり勝き景色の其中わ坐りて余い竊わ思ひけるらく「抑人の罪のために樂園の有樣い大いに傷たれとも其景色の美と尙多く存す然も罪人の心神の思わよりて新にあゝ時い樂園の有樣舊わゝへりて見ゆべし此景れ山川海陸高低等の種々の模樣を一致わまじへて其美をるゞ如く神の恩によりて改まりたる人の心も諸〳〵の思想一致に善くわひまじいりて其美を顯すわいたるべし」と斯るん思ひつゝ斯して余平地にある村を見おろしたり其處にエリザベツの妹の葬られし所あり是わおいて彼葬式の樣あと思ひいだし又今い彼も天國にあるあらんと思ひて大にエリザベツの働作を感

じたり是おつけても、一家のうちに信者わりて家族の者を導く事の必要なるあと知るゝあり即ち余思ひけらくエリザベツい唯に妹を神に導くをえたるのみあらず父母をも同く導くわいたり又神の恩によりて他の人をもみちびくわ至るべし人を引てキリストに歸せ去むるい誠に尊き務あり一同打ろろへて天國にむのひて進むとてろの家い如何に幸あるらん願くい斯る家の日ゝわ增ゆゝんあとを」

茲わ又左右の平地にたてる家々をあゞめたりあゞ見るにまたゞひて感ずる心ゞおてりける嗟乎是等の人の中神の道をまらず神の恩をまらざる者幾何あるや是をおもへば斯る人をそくひにみちびくことを務めはげむべきあり、神は彼等を貴き者と見做たまふ然べ我等も之を然見るすべきあり、エリザベツも亦

此事を深く心に感じたりと見ゆ彼い「夜來らん其時は誰も事をなを能わず」と知て日の中に務んとせり其事い是後の書信や談話にても明らかに知る

斯て余家に反り今山にて思ひ考へたる事等を書にまたるまめて

エリザベツの許におくりやりけゝ日曜日の晩に呼びてエリザベツの許より左のおとくに言おてせたり

一筆あめし申しあげ候婢は今日會堂へまゐるみとをえず候併おゝら神れ何處にもまし

ますみをゝ有りゝたし婢と何處わをりても神は常にともわいまをと思ひ候神の御前にあれゝ樂園にあるゝでとき心地せられ候なり願くい神の恩と聖靈に二倍ほと君にのゝみて君の今日の働作をみとゝく助けたまへ神いろの御名をもて集る者の中に必ずわらんと約し

たまへり願くい君ゝ此言の信あるを見明にいたらきんてと

を神の契約い皆まおとに貴し我等は神の御言をうたゝふべ

らず神い決して人をあざむきたまいず若人信仰をいだき

て事をゐさを必ず神の恩をうむるにいたるべし婢い今日

君の懇切ある書翰を讀みて慰をえ候婢いとゝ國の教會わ神

を愛し神の名を畏るゝ教師の許多あるゝために神に感謝し

奉る人ゝ救を尋ぬる處に救あり願くい人皆エスのために救

をうるに至れ願くい神のえちみたまひし器ある君ゝ語るゝ

言によりて人ゝの救いるゝわ至らんおとを願くは君の言神

の御手の器とゐりて迅き箭のごとく來りて諸の罪を射殺ん

おとを余いまてとお神の言をきくのみおて行いざる所の人

ゝゝ君の言およりて感化せらきんてとをねゝふゐり閣下よ

神の榮光をあらはすことゝ人の魂をすくふことを務められよ然ば今の世も後の世も幸ゐして君の得たまふ冠ゐ光輝のますにいたらん我等ゐ「主よ天ゐおいて御使たちゞ主の御意をゐそごとく地ゐありて我に御意をゐさゑめたまへ」と言て主のために働ゐんことをねゞふ君も主の面をみて主よ我は此ゐをる又主ゞ我ゐたまひし人々も此ゐわりと言ふを得たまゐん夫善をゐる時ゐ必ず樂わり是天よりたまゐりたる能力を用ふるを思ひて滿足べゞゐり然るを善をゐすを怠るゐ不思議のいたりゐりといふべし竊にゐへりみて此身ゞ善をおてゐふゐとを怠り十字架を負て神のために働くゐとを疎かにせしてとゐるを思へど如何ゐかゐしゐらずや誠ゐ恥べきゐり斯ギリストを人ゐ示すを恥たる時ゐ神の恩の坐に近

くに憚りゐり斷をゐそに安ゐらぬ思ゐり我等ゐ互に愛して善をゐすことを命ぜらる想ふに神の事につきて心を合たる人々と皆我等此世ゐてキリストエスにをりて交ゐりて斯も幸ゐゐらば天國にいたりて御位のまゐりゐて會ふ時ゐ如何に樂しゐらんゐ」と言ふをうべし君よ婢は君と御内室とゞ共ゐ一の心をいだきてゐまさんゐとを望み候若然らば俱に一致為て今と後の幸福を來すの事をなしたまふを得べしキリストは弟子をつかはすに二人宛つゐいしたまへり是は互ひゐぐさめゐひ助けゐひて主の命をゐさんゞためゐりき婢ゐ神の道を知て事をなす此年頃多くゐ一人にて罷りゐり誰もまちゐる者ゐく候然るゐらに神の恩と愛を詔りゐふ人を得るゐ此餘ゐき樂に候ゐり神の限りゐき愛を天の使ゐかたり

つゝ長久にあるは如何に樂しき事ならんや閣下よ君は貴き人を措て添けるくもわゞ如き賤き者と交りてたまふ誠ふありがたく候あり又神の余れ共子を呼び聖靈より生れたる者とあし榮光にいるべき者とあしキリストと共に天國を嗣ぎ為めたまふ是いかゝる恩ぞやいかゝる榮ぞや是をれもへが務めざるべからず深く此事をりんゞへ候へば幸福身にあまりて有りがたく此上の福をねがわず富を羨む心い更ゃてをゝく候反て富る者ゞ其大なるゞ如くに善人とあらざるを見る時と之をあはれむのみキリストい奴僕の形にて世ふいでたまひたれば之に似んてとて厚願しけれ請ふ婢の過失をゆるし誤謬をあはしたまへ婢い近々に家にりへらんと致し候へを家あて父母とともに君の御來臨を相待申し歡樂をつくすべく候ありがしく

日曜日

リチモンド教師様

エリザベッ拜

是の如き書をよみては感ぜざるを之ず余ふゝく感心ゝて之ゞ
ためゝ神ゝ謝したり「昔者エホバを畏るゝものたゞひゝ語りエ
ホバ耳をかたむけて之を聽りエホバを畏るゝ者れよびろの名
をれば忘るゝものゝためゝエホバの前ゝれば之の書を志るされ
たり」彼記念の書い尙閉ずにれきたまふ（マラキ三章十六ヲ見ヨ）

第三章

人の心い現在の事を考へ又過去の事を思ひいだし未來の事を
思慮る等種々とあすゞ故に殆も活る繪畫のごとし久き先に見

聽したる事も之を思ひいだして今目のまへに見聞するごと思ふがごとくにあるとあり斯思ひいだす事れうちゐ喜てゞしき事も多かり殊に神の道の上ゐ就ていゝ記憶は誠に道に進むの具ありとゞ此の活画ゝ望といふ者によりて復一層の美をますべし望は過去現在の事を未來にあはせ考へて心をはげまし遙かに遠かる契約を見て其眞を信じて之を已の者とす人心にかくのごとき思をなす時神の靈てれをたすけめぐみて道にすゝまゝめたまふ夫心も體も皆キリストが買とり賜ひし者なりと思ふ時ゝ其面目改まるあり、然ばてろ使徒パウロゝ斯言たるあれ「汝等の身ゝ汝等が神よりうけたる汝等の裏ゐある聖靈れ殿ゐ在て汝等ゝ汝のものにあらざるゐとをしらざるゐ其ゝ汝等之價をもて買れたるもれるればなり是故ゐ神の者なる汝

等身ゐおいても靈魂にれいても神の榮をあらゝそべし（前コリント書六章十九二十）

キリスト信者ゝかつて爲たる事ども、を記憶して大ゐる益をうるとゞわるべし殊に已に沒たる友と前に交ゝりたる事等を思ひ出をてと屢ゐる時ゝ記憶れ力おはいに增べし夫一の事を思ひいだせば隨つて又他の事胸ゐうゐて遂に樂き心に相成べし或歌人の言けらく

頭なる、腦の中の、千五百房に、われの思想ゝ、みゐともに、見えぬ鎖に、彼と是、繫りゝも、靜りて、臥てゐなる、然るのらゐ、一箇れ思想、喚起ゐば、百千萬と、皆ともに、起いできたり、互ゐも、入てゝのむり、種々に或ゝ喜樂、或ゝ又、悲哀を志も、心にし、おぼえしめつゝ、もろともゐ、あひありまりて、はどよくも心の線を、しら

べつゝ、治理むるあとゞ奇しのりける、

然も我はいまは拔わわゞ嘗て彼牛乳屋を訪ねたりし時の模樣を思ひいださんとす願くゝ神の惠により此事我れ益となり又之をよむ者の益となるにいたを

前に掲げたる書信を得たるのち暫時ありて余始めてエリザベッの家わ到る其路ゝ細き田舍路にして胡桃あとの樹兩側わ生茂りて日の光を遮ぎり又花や灌木や若木等いりみだをて誠に美玄其邊に處々に大岩あり泉れ音潺々として其中より流いづるもありて其景具わ佳がり又道の卑き處よりして遙か遠くなる景色も見えて高山の峯あと望むべし峰の上にゝ石碑燈明臺あどれ立る見ゆ且又麥田の黃みたるも處々わ見えたり又路の高き所わいたれゞ海わ船の鷗のごとくわ浮を渉れるも見られる

然ゝあれども此路ゝ多くゝ樹蔭わおはれて見るわ心の清々しく觀念れ心頻りわ催ふさる嗚呼天地萬物の美を觀察するを知ざるものは如何ゞゝり損ならんゝ造物の神ゝ萬物をもて其榮光をあらはしたまふ誠わ萬の物皆神ゝ我を造りたまへりと言て神の榮光をのぶるなり玆に余牛乳屋の家に近づきしに彼老人は二頭れ牝牛をれひて小屋わおもむく所ありしゞ其目かそをれを余を見つけざりき余すゝち近くよりて聲をかけたれを驚き我てをみ悅ゞ玄げの面わて言けるやう「善ゝ來ましたれ有りゞたし此週間ゝ毎日君の御來臨を待をり候」とゝく言をはるゝと等しくエリザベッ家へれ戸をあゝて母とゝもわ出きたり喜悅の涙をうゝめて我をむかふ我即ち馬より下りて奇麗ある小庭園にをちびゝれていりぬ其處に楡れ大木二本たゝく

聳えたり其家は内外ともゐ奇麗なり爐れ兩旁ゐ古き櫪の圍手椅二箇あり是ゝ翁嫗二人が業務をへて休むとゐろれ者ゐり隅の架に聖書二卷と外に教ゐゐるゝを書物數冊あり其間に窓二ありて一の窓より山や森ゐど見ゆ又一の窓ゐゝ葡萄の蔓半ゐちみふさゞりて其葉のゐひだより日の光照しゐみて内をゐまねく照す余之を熟々見て謂へらく「是ゝ信心と平和と知足(滿足)ゐ適ひたる住所なり我も此ゐ來りたき也神れ惠ゐまりて是等れ德ゐ進むべき教を此に得んとを願ふ」とゐくゐん思ひたりける時ゐエリザベッ言いでけらく「閣下よ我等ゝ君の來臨にゐづゐるべき身分にゐらず然るに君ゝ遙々と來りて訪問たまふ誠に有りがたく存じ候」余之に答へて言ふ「已きちの主キリストゝ更ゐ遠くより來りて我等罪人を訪問たまへり即ち

キリストも天の父の懷をいなれ其榮光をすてゝ恩と愛のためゐ此世に降りたまふ若我等キリストに從ふといふならば互ゐ助けゐひてキリストのゐされしごとく善をゐすべきにゐらず」と斯語る時老人もいりきたりて余に挨拶をゐくて談話の中に直に彼死たる女子の事ゐ及びたるがエリザベッの信心と愛情ゝ其言れ上にゐきらゐゐ顯れたり又彼と只田舍れ貧き人の女子ゐりしゐども奉公にいりたる家々ゐて禮儀作法をゐらひれば如たり但し信心ふゐきがために誠に謙遜ゐりき彼は我の到れるを幸として其身と父母の利益ゐなるとを聽んとしたりしゐども其振舞誠ゐ禮節にゐゐひて見ゐくゐらず彼が如きゝキリスト教徒の堅心と掛念ゐ婦人の温柔と女子の孝行を兼たる者といふべしキリストを信ずる者ゝゐくゐろゐらまほし

けれ余亦エリザベツの働作の空うらすして終に其父母をキリストにみちびくわ至りしを見たり斯彼がつとめたるゝ眞おあり〻たし神もし御恩をもて子を父母より前に召たまゝゝ其子〻父母を神にこちびくべき務ゝ如何にはいあらんエリザベツの如きは其務をりくしたりといふべし誠わ是翁媼等ゝ女子エリザベツをゞ神の道をしめす教師と見做したりと見ゆ斯のごとくあれとエリザベツと又孝行の道をりくし何ゝに父母の世話をあしたりエリザベツの信仰と道わゝるひて尋常ならず彼は神の罪人を救ひたまふの道を明らかにしりて聖書の其教わ委しのりき彼又是まで信仰にすゝみ來りし履歴を語りし〻眞實の信仰の如何なる者あるゝを善ゝれること言の上にあちゝきたり彼ゝ神と云たゝむ事ゝ重に愛わよりてキリストに

似んと志すごとく信仰によりて又キリストの中にをるに在と信じ又神の罪人を愛したまふ愛心と罪人のあすべき本務は更ふべからざる性質の者ゝりと信じたりエリザベツは彼を信じ頼み是わ遊び行ひて神の平和をえんあとをねゞへり彼聖書の外にゝ只數冊の書をよみたるのみなれども其書物ゝ皆善もの〻わして善く其書の言ふ所をよみわけて之ゞ價値をゝれり

此時エリザベツの顔ゝ青白く見えたりゝゝゞ是ゞ肺病の前徴ゝりける因て余謂けらく彼長くゝ世わゝゞらふるあたゝゝずと偖うゝく樂しく語りて數時間をへしゞゝ家にのへらんとおもひて暇をつげたり是等の人の人とゝりは其別をの挨拶の言にてもゝらるべし老母の曰く願くは神君を安然に家にゝへらゝめたまへ又君ゞ來りて我等貧人を訪ねたゝへる今日の日をめぐみ

さちはひたまへ請ふ復來りてたまへ我い無知にして君の如き御方と應接をえざるとも娘がうりて御はるし申さん娘い老の身の此餘おき慰藉ふ候只神が娘を世ふれきて吾身の死るまで杖柱とおらゐめたまいんゐとをねがふあり」余たへて云ふ「神は我汝が老るまでも汝の神となり汝が白髮にいたるまでも汝を懷き負ふといひたまへり（イザヤ四十六章ノ四節）此御言を信ぜらるを」娘即ち言ふ「君が婢と婢の父母ゐ親切をつくしたまふを感謝したてまつる君の今日の御訪問に神の恩くだりゐと信ず婢之を感じ候父母必らず之を心ゐゐるし候いん吾が救主

キリスよは燃る木を火の中より引いだすが如くに吾をひきだして生命の道と平和を求めしたまふ誠ゐありがたし吾は主の榮光をあらいさんてとをねがふ又父母が神を信じて福祉を

うるゐいたらんてとを切ふのぞみ候」余答ふ「黃昏ゐ光あらん（ゼカリア十四ノ七）との言今此段ゐれいて成たりと思いる」エリザベッ言ふ「婢其を信じ其幸の望のために神をあがめ候」余言ふ「御身が父母を光ゐみちびくの器たりゐを也神ゐ感謝せられよ」彼言ふ「然致し候然れとも吾が身の足ぬ所を思へゐ喜びつゝも慄へ候ゐり時ゐ老人言いでけらく「主エホバ必ず君の此親切ゐ報いたまいん我等い老たる者且罪人ゐれとも神が此十一時にゐいて我等に恩をはとゐしたまふ樣に請ふ君神にいのりたまへ

エリザベッい身と心をもて我等のために働き候彼い一日もたきて我等の勞苦をたすけ而して又我等のためゐ聖書をよみ又勸め斷ゐとして我等を志て神の怒をまぬゐれゐめんとす彼いまゐとに稀ゐる子に候ゐり」斯たがひに打のたらひて別れ來

り玄ゞ歸路に是等の事をおもひてよろてびて家にいりぬ此後も倘玄ゞ訪問たるてとあり玄ゞ常も喜悅を之たり然るわ一度久しく牛乳屋の人等わ會ぬわいたりしあとあり其時ユリ

ザベッ左の手紙をおくれり

拜啓其後ハ無音わ打過ぎ候婢ハ久しく閣下より音信を之んてとを望みをり候然ゝらに今また書面をさしあげ候不遜の罪は幾重わもおゆるしあつてたまハをよ婢ハ某の處を去てより己來家にのみ多くハてもりをり候彼日寒氣をひきて其より次第わあしく相なり候なり此頃の天氣よき日わハ外にも少しハ出候へども此有樣わてハ迎も長くハ世わわるまじくおもハを候願くハ神わ榮光わを世をさりて神とともわ【わ】らんと思へゞ樂くもはべるゞのし我ハみづから罪の勸作を

れば之でうれふれどもユスハの御恩を我わはどてしたまへゞ我ハユスの御物を信じをり候歌人の言に

わゞ靈ハ、ユスの言に、ての土の、のちだをはゐれ、よろてびて、難く道を、ゞ玄りつゝ、すゝみてもとめ、わゞ神わ、あひたてまつり、長へわ、樂き國わ、わらんとし、おもへゞいとも、たゞふとりけり

どわるも實に此時の事とゞんじ候婢ハ恒に神によりて生きゐゞらへ神のめぐみわよりて樂き心を懷きをらんあとをねゞひ候なり然らずバ生るも死るも幸わらず候我等わハ此平和をさまたぐる多くの敵あれバ恒に醒醒し祈りて此平和をたもつてとをつとむべし婢今はよわりて何處へも激をきゝわいづるあとをらず誠わ殘念わでざさふらう去日曜日に閣下ゞ某の處にて說教なされ玄を聽たくは思ひ玄のとも歩み

ゆくてとならず去て心ならずも打過候定て君が言ふよりて幸福をねたるもの多からん嫉は深く其事を神ゐねがひ候然みがら歎いしき事には世の人は一度よゑれたるのみにては其睡をさまさず候然しみがら説教者が聖靈にかんじて熱心ゐゐりて懇ゐ生命の言をのぶる時い神の言甚だ力ゐりて人を感化す斯る時い神の言我等に諸の事を示し我等の心を明かにして黒暗の事等をあらいし神の寶藏より新しき物と古き物をいだして與ふるゐり我等い神が其御意ゐ去たがひてわをらの中に働きたまふやうに願ひて忠勤の僕のごとく務めはげむべきゐりわをらの主人は善き者ゐましませゑ必ず其愛の働作を忘をたまはざるゐりと去るべし我等もし彼天にわケてをれらをまつ榮光の冠に目をりくるゐらゑ善をゐ

すに倦てとゐかるべし只ひたすらに忍耐と喜樂をもつて神の道に歩るべきのみ然れゑ此世の些細物に心をうゑゝれて神に遠ゐり魂の福祉をうしなふがごときゐらじ我等の信仰をもて神の子によりて生るゐらば亦人をそゝめて神を求めさそべきなり我等はエスがわれらゐなさをし事を人ゐりげ又エスが其人のためにゐさるゝ所をつげ去らすべし又眞の信者ゐは樂き望のゐるものなるを去めすべしわれらの心斯神におもむきをる時はわれらい神を崇め其恩惠を心ゐおぼゆる事まそ〳〵深くゐりゑきて決して彼富人が自己の尊榮を求むるがごとくゐらず神が世の大罪人をよろてんで救ひたまふを思へば我は此身が其務ゐ怠るを感じて歎き候夫愛の神いりく見たてまつる時は如何に愛すべく我等罪

人に見ゑますか誠にいひつくしがたしのくのごとくゐ考ふる心いゝに幸なるゝゐ某の死去てよりのち婢とつねにかくのおとき思をいだきをり候ねがはくい神我れいたらぬとゐろをもるしたまへ我は彼人に語り且書をおくるをわが身の義務とおもひ候其事にけひていつゞや御むゐし申したるおとゝさだめておぼゑいますゐらんゐゝに尙便よきときをまちて之をなさんもれと待をり志に豈はからんや神むやくも其人を冥土にいたらせたまへり我はまゐとに其ゐゝろざしを行ゝざりゐを悔てなげき且はちいり候今ゝすでゐ遲しいゝんせんや是ゐよりて主の志めしたまふ時はど善き時なきを知り候ゐり若わを彼が存命中ゐ之にキーリストの賜をゐたりたらむ彼がきくとさゝゐぬゐ關らずわが責ゝのがをし

なるを斯ゐりたをゞせんすべゐし我もし神がのく彼を急ゐとりたまゝんと知たらゞ幾重ゐも働きて彼をすゝめしゐらん但し神ゝ我等のなすべきことを示したまふ神の自らなしたまふ事ゝゐらせたまゝず是まゐとに十分ゐり請ふ君りとめて神のさかえをわらゝしたまへ時は早くすぎもくゞゝし我等ゝとはゝらず天國の樂き安息ゐいるべし婢ゝ神が熱心と愛を君ゐみたしめ日々ゐ人をキリストゐ導ゝせたまゝんことをいのり居るゐり願くは神大膽ゐる心を君にさづけて人をおろゝふゐとゐゝらゐめたまへキリストと其忠信なる役者と世の終までともゐあらんといひたまへり之をわそをたまふなゝれ危難ゐゐふ事多々れゞキリストれ助をうるゐと愈おはいなり然ゞ畏るべきものは只キリストゐして外ゐ

と絶てゐし婢の弱き身と弱き心とキリストの大いなる力のあらはれんことを神にいのりてたまへエスあければ何もできず候之にひきうへて聖靈の教をうくる時は他の師匠はいらず候なりねがはくは神聖靈を君にたまひて神の恩をうるはしめたまはんことをねがはくは君がキリスト、エスにありて神の愛の高深、長、寛をさとるをいたらしんことを右はおもふ所をあら〳〵申しのべ候あり請ふ凡てのわやまりをゆるしたまへ

ゑりざべッ拜

月日

我あの書および其他エリザベッがたてしたる文をよみて考ふるにエリザベッは謙遜ある弟子のごとくして亦忠實ある諫者のごとくあり是まことに妙なりといふべし

第四章

夫罪人が黑暗の權威をのがれて神の愛子の國に至るはキリスト信徒の喜にして天の使の感歎するところなり凡て罪を悔て赦されたる人は皆救主が罪と死と墓に勝たまひし事を証するなり嗚呼其變化如何に大なるや怒の子が恩の証人となる即ち火の中より燃柴頭をひきいだしたるがごとし奇なる哉人キリストにあるときは新お作られたるものなり舊はさりて皆あたらしくなるなり信者の經歷をたづぬるに實に驚くにたゆ其人はダビデのごとく多くれ人をおとろかすなり但し自らおとろきあやぶむことと殊に大なり他の人は疑ひもせんなれど信者たるものは最初より終まで恩にて救れしことを堅くみとむるなり眞正のキリスト信徒の性質等は吾國の教會にて言ふとお

ろに善くあらわれたり即ち神の恩と慈悲の及ぶとおろの者の事を言ふ時に吾教會わて言ふとおろの左のごとし「神れ斯る貴き恩をかうむる者は程よき時に神にめさる其人ゝ恩によりて其召に応たゞふを之神に義とせらを神の子とあるを之神のひとりごエスキリストの形に似ることを之信仰をいだいて善をゐそを之終に神の恩わよりて限なき生命わいるに至る」

凡て信心ある人ゝ斯神の智恵と權能と愛心を考ふる時ゝ此餘るく喜べしくれぱゆるゐり是ゞためにろの人ゝます〳〵信仰をうたうして神を愛するわ至るべし茲わまた他の人の上にあらはるゝ信心の光を見る時はまおとに樂しゝ吾いま此わきたるそエリザベツの身れ上わゝキリスト信者れ喜樂と盡力いちゝるくわらゝれて實わ殊勝なりエリザベツはエスゞ道わいまし眞理わいまし生命にいますおとを深く信じたれぴ之を人ゝわも証據せんと望ことたるゞおとし彼ゝキリストわ儆ひ善事をゐして人々わ其身ゞ神にめされて義とせられて神の子となりたるおとれ眞實ゐるを志めさんと願へり彼ゝかく信じたゞひて終わ神の恩によりて長久の福祉わいたらんと信じたり我ゝゞ住たる寺領の外に今一の寺領をあづゝりゐたり其寺領ゝ小き地にして人のゝずも寡し其處れ會堂ゝ小山れ上わありて此わいたる四方八方の路ゝ皆格別わ面白き景色をゐへたり其一筋れ路ゝ海岸より田舍屋の中をとはりて上る者あり又ろの一筋ゝ隣山の傍をめぐりて來る其ゞとりにゝ多くの羊草くひをり又今一の路ゝ高岡の間をだん〳〵わのぱりきたるろの兩側わゝ種〻の草木おひたゞげりて花もさきみだをて美し我ゝ

志むゝ是等の路の皆見ゆるところに上りて其路々をのぼりて會堂へきたる人々を見たるあとあり期人々ゞ神の家に上りきたるを見る時い種々の喜むしき思もれありて實ふよし一日禮拜のまへにあたりて暫く彼處あのぼり見し時ダビデがいひあらいしたる喜樂をかんがへいだしたり其言い詩篇百二十二に見ゆ云く「人我に語りて去來エホバの家にゆかんといふ時にい我喜べりエルサレムよ我等の足い汝の門の内わたるんエルサレムい稠密れ邑の如くに建つ諸の支派此にのぼりゆく即ちエホバの支派イスラエルのために證詞をあしてエホバの名を頌美む」

我是に於て禮拜の益を感ずるに至りて謂へらく幾何の救れたる人今此わ祈と讃美をあさんためぬ神の言をきゐんためぬ生命の

パンをくらいんためわ集りをるよゝ彼等い各其家をとゝれて今祈の家にあつまらんとず是まゝとに善牧者ゞ野の四方より羊を牢によびあつむるの樣を美しく描せる者あり此野山を男女や小兒ゞ覆て近よる其ごとく多衆の人東西南北より來りて神の國に坐するわいたらんと斯ゝあん思ひつゞけたる夫誰ゝ斯る時の貴重を善くはゝるをゝえんや即ち天の平和をまゝふの時神わ事るの時罪人をすゝめて未來の罰をのゞれゝむる時無知の者をゝまへて生べき道と死べき道をゝらゝむる時貧き者に福音をゝたふる時心のいためる者をゝぐさむる時擄人に釋放をつたへ盲者わ明をうるの事をのぶる時斯のごとき時と豈たふとゝらずや詩篇八十九に云く「此嘉しき音を知る民は幸あり エホバよ彼等は汝の顏の光にあゆまんエホバの名によりて彼

等はよろてびエホバの義ゐよりて彼等を高められん」とまてと
ゐ此事あり是において我また神ゞ罪人をすくひたまふ事にり
いて役者の職の大切ゐるを感じたり因て我神ゞ我にまのせた
まひし人〻ゞ我の息のためゐ迷ひて牧者ゐき羊の如くゐり或
ん盲者ゐ案内をたる盲人のおとくゐらざるやう竊ゐ祈り常ゐ
いつも福音の眞理をありのまゝに人ゐつげて神の榮光をあら
ん し教會れ盛にゐるやうに務んと思ひさだめたり茲に不圖見
おろせば會堂の路に彼牛乳屋の老人ゐゆみ來をり欺んるゝ參
りん、せじと思ひしに感じいつたるゐとゐりけり老人は片手ん
杖により片手ん一人の若き人ゐもたれてのぼり來る彼若者も
わゞ知る人ゐり彼等二人ん神の恩惠をかたりゐひをりゐゞ老
人ん云きりに神ゞ其女にたまひし恩をゐたりてエリザベツを

はめたり時に我其人等の許にもきて會堂へつきだちもけり老
人云ふ「奴ん娘の所より手紙をもちまゐり候禮拜の時刻にれく
れじといろ〻候此老の身にん七里の道んりたく候ゐり但し御
目ゐりよりてまてとゐうれしく候」我言ふ「御娘子んいのゐゐ候。
や」答ふ「まてとに悪しく候醫者は癆瘵とまうし候善ゐるかと思ふ
時もあれど亦心配に相成り候君のゐらるゝごとく我等ん娘を
愛する理ゐるものなきゞ如何にのなしく候ゐや但し神ん善や
うになしたまんん我弱きをゆるしたまへ」といひて書翰を我ゐ
わたせり然るにはや禮拜をとじむべき時ゐりゐりゞ之をよむ
ゐとん後ゐのゞしぬ此老人ゞ禮拜につらゐり居ゞために誠ゐ
喜き思ゐおゐりて大によりりき此にん富者も貧人もともにあつ
まりて神を主とゐふぎ皆もろともゐ神にたよる者ゐりと云り

て一れ父ゐねがひて今世未世れ福をいのる其次ゐいたれば富人も貧人も皆墓ゐれいて一緒ゐゐるなり又ろの後にい富者も貧者もみゐひとしく神の裁判の座のまへにいでゝ其行爲の善悪に応たがひて報をうべし、此三時いふくくゝいりゐふ者ゐりといふべし

斯で會を散じてのち我牛乳屋の老人および其に類する二三の貧人と物がたる彼老人い娘れ事をいいでは長く語るを之ず即ち神がろの孝女をもて已ゐはどてしたひまし恩の大ゐるをのべたり凡て眞の信者い皆已を神にみちびきたる人を愛するものゐるが若其人が親子のごとき親き者ならば其愛情いいのならんゐ老人其家の事を人にものがたるあひだゐ我手紙をひらさて讀むに其文に云く

憚り乍ら復もや運ぬ筆をはしらせて再び貴覽に呈へ候先日い態々御労書を投じ下され感悦斜ならず誠ゐわりがたく拜誦去奉り候婢は此頃身体よりとり來て歩行も思ふまゝゐらねば會堂へもゆのれず去て家ゐのみ罷りゐり候此迄會堂へまゐることを此餘ゐき樂みと思ひをり候ひしが斯なりゐたれば今いぜひゐく候なり誠ゐ婢い常にわが神に會ひたてまつるを喜びて主の日の來るをまちゐぬる心地去つゝ勇みて會堂へまゐり候夫神の恩い千尋の海の底よりも深くして測ふ者い皆其御恩を蒙るゐとをうるゐり技ゐ過にし事を考ふを會堂にて是迄常ゐ神の愛を心に滿たる熱心の教師が神の恩をうけて宣らをたる言を聽たる時わが心のいりに嬉しく悅しかり去の思ひいでられてゐづうしく相ゐり候斯る教師

の顔ゐ彼昔モーセガシナイ山よりくだる時に其面れのゝやさし如く光りゐやく様ゐ相見え候然ばわが君もモーセが神に倣ひしおとく神にゐらひまして主ゐる神が君のうちにましますごとく君が神の靈によりて神の中ゐいまそてとを人々に云ら云めたまへ願くゐ君神の榮光のために事をゐさるゝ時ゐ神の敎と助を蒙りたまいんゐとを是婢の望さに候ゐり數ゐちぬ身をもて斯る事を申すゐ嗚呼が主くして憚ゐきゐ云もあらねと是も心れ眞情よりいでたる者ゐれば咎めずて聽たまへ婢ゐ常に君が神の靈の働を心に感ぜらを又行爲の上ゐ之を認められんゐとを只管神に祈り且君が萬事をキリストの貴き血ゐゆだねたまいんゐとを主ゐねがひ候君も

し斯なりまさを神の力によりて諸れゐしき事にうち勝ち彼歌人がのべたるごとく言ふをえたまとん

世をおろれ、靈の道を、彼是と、まげもすべきゐ、言にも、行爲にもたけく、わが神の、証人たらんゐ、人にれば、神れ言を、ゐくしゐが、神の御前ゐ、いかにして、出てたゝんや、御怒を、如何ゐ避んや

世の人を、憚りつゝも、汝が言を、柔げのべて、白銀や、黃金を、えんゐ、十字架を、負てゆゐんか、

わが懼れ、えゝりゐすゐ、何者ぞ、人か水泡ゐ、死れ刺を、のがをぬ人ゐ、もろ〳〵の、罪の僕從ゐ、

斯る人、怒らを怒を、我は汝が、袖の下にし、いりぬれを、何のおゐをん、汝が愛は、吾をのくまふ、

キリストの、其いつくしみ、世れ人の、まよへるものを、尋ねつゝ、引てゝもどり、涙もて、そくひてたまふ、

我の名は、ろしらべろ志れ、十字架を、我身はむちず、嘲笑は事とも、せずて、神をのみ、おろれ畏みむ

願くゝ君其職務の重く貴きものゝ為ることを心に志りて神の道ふゝゆゑ萬の事ふ神をまるびたまえ牧師の職ふ居る人ゝ最高き神の使者あり然れば君のごとき人ゝ天の使の如く聖くして愛情と熱心をみて、人の靈魂を神にみちびくことを務むべし斯言ふも言ひそぎにゝわらじと思ふを候誠に斯る人々ゝキリストにのゝりて罪人を神にゝへら志むる者あり然のらに君等れ職務ゝ天れ使のつとめよりも重し天使ゝ神の國ふ入たる者れたために事をなそゝをぞも君等ゝ人をゝちびきて神にゝへら志むゝれば君等の務めは先にして天の使のつとめゝ後ゝりと云べし夫牧師たる者ゝ日々ゝ人をキリストふゝちびき歸んとて務らるキリストゝ天にのぼりゝたまひて罪人の爲に神ふとりゝし其身ゞ罪人にゝのゝりて死たる績をもて人の罪をゝゞゝんと志給ふ然ゞキリストと牧師とゝ靈の働ふ依て誠ふ俱ふ働く者なりといふべし然ゝいへともキリストゝき時ゝ吾等何をも爲を之ず我等の力むキリストれ力ふしてキリストゝ眞に始より終まで榮光の歸する所ゝりとす願は君活る信仰をいだいて神れ羔なるキリストふ堅すゞりたまへ父と子と聖靈ふ樂き交をなしたまへ謙る愛心をもて深志づゝ神の生命によりて高のぼりたまへ是わらはゞ君れためふ祈り求る所ゝり斯志たまゝゞキリストの美さと其長の

榮光明を見て君の心を眞の喜悅とちゐふをん若わらはゞ信る所をてとにして過ゐくせわらいもみづから世のなゝの諸の財室よりもキリストの恩惠を蒙らんとをねゞふキリストの恩をと此世の財寶とをくらぶる時い世れたのらは價値ゐくして然のを心をのくべき者にわらず之ゞためゐ氣をひかれて神をはゐるゝゞでときい決てよゝらず神みろ心をつくして愛したてまつるべきものなを然ゞ何事をゐすにも神の御目のまへにゐすと思ひて愼みてゐし罪ゐおちいらぬやう心ゞくべし且キリストの日ゐまし已れらの目に貫く見え來るやう又われらの心ゐ愛すべく成り來るやう神ゐねゞひ求むべきなり

神の人を愛したまふ事をかく拙く書つゞる間わらはの心に

い肴難き思想みち候過にし時のわゞ過罪と是までの神の恩惠とをゝんゞへみれゞ神の愛い誠ゐ大ゐして假令婢に智者や天使の智力あるも迚も之を十分にのきわちはすことを得じと思いを候斯るゐとい人に語るよりい寧心ゐ思ひたのゑむ方然るべし嗚呼思ひめぐらせゞ人いみゐ神のゝゝる深き恩をうくるにたらぬ者ゐゝり神の恩い誠ゐ廣大無量なるゐゐ婢みづから己の心の穢きをおもふ時は屬力をれとすみとゐり然ども信仰と希望とゐよりて復心をひきたて使徒の厮のごとく神ゞ其をたまの賜物と恩惠をもて我にみたゑたまいんてとを願ひ且わゞ神れ心にのゐふやうに凡て清き行爲をゐし神をかゑゐみて正く世を度るゐ至らんことを求む婢若餘ゐ言過たるゐらゞねゞいくい恕したまへ請ふ此次に

書翰を寄らるゝ時にわらいれ過失をたゞしわらいを勸めみちびきたまえ婢い只祈禱をもて君の厚情にむくゆるお得るれみあるをば只管に君の御家族れ皆神の恩にうるおひあさるやう神ゐいのり居り候婢考ふるにキリスト昔ペテロに問たまひしおとく君ゐも亦「汝我を愛そるや」と問たまふ願くい君も亦「主い知たまはぬとゐろなしわが汝を愛するゐとい汝ゑりたまふ」ヨハネ傳廿一章十七

ストの羊を牧ひ愛と謙遜と熱心をもて萬事をゐしてキリストゐ其ゑるしを志らゐめられよ願くい君熱心にとたらさて罪と惡魔の城をたふしキリストの教會を建てたまへ義の種をまきて神ゐ求めて百倍の實をゐたまへ願くい君の行爲徒ゐならずして其まゝる種の芽みいでゝ遂に花さき實り天ゐ

いまゝ神の御榮光とゐるゐいたらん事をイエスい君を慰めんためゐ斯のたまふ「罪人を志て其惡き道をはゐれゑむる者い靈魂を救て死をまぬゐれゑむるゐり」ヤコブ書第五ノ二十

くゐれば君の冠のゐゝやきい榮光をまそべしキリスト其忠義なる役者のためにゐくゐしたまふゐり

望らくい君罪をば見るゐまゝゐ責め戒めたまへ必ず神れ助ありて畏懼と恥辱とは御身をゑゐれてさるべし君の行爲にゑたゐひて神ろの大ゐる平和と智慧と力と勇とをあたへたまいん君いパウルのごとくゐりたまふべし卽ち博く學びをられば神の助によりて上下一般の人に道を志めすことを得たまいん願くい神の榮光をおもひて決して人を恐れたまふゐれ人の此世れ譽よりい其靈魂いはるゐゐ貴く候ゐ

り且又君ハ諸〻の病る者を見まふあとをうるの地位ゐゐたまふ夫人の艱難ハ志バ〻神の機會とゐるあとあり然バ君うくして神の行爲をゐすの器具とゐりたまふべし神ハ器具を用ひずに事をゐすをゐたまへども常ゐ器具をもちひたまふ嫡ハ敢て君ガ神のゐらみたまへる器具とゐりて其名と眞實をあまねく人に傳へられんてとをれぞむ病る者をみまふハ神の命ゐしてキリスト信徒のゐすべきてとなり病る者をみまふより志て如何なる善き事ガ生ずるもはゐられず候然るゐ此事を疎にそる者あるハ歎ハし世ゐハ會堂にいでゝ教を說き教をきけバ其務ハすむと思ふもの多し然ども是なは足ざるなり願くハ神人を志て其己と同じ儕ゐる罪人を憐むの心を起さ志めたまへ生命のある間は望のある者ゐれバ決して

人をみそつべからざるなり

請ふ嫡の言ふとゐろの過をゆるしたまへ願くハ神萬事にゐいて君をめぐみたまへ殊に君ガ嫡と嫡の父母ゐ交りたまふ所に恩をくだしたまへ嗚呼一家族の中に神の教を傳へのふるハ樂みゐるゐな君のねガひも然ゐらん歟嫡ハの望ハ誠に左の歌のごとくに候

わガ神に、われとわガ家と、皆ともゐ、事へんなれど、わガ身まづ、神のてとバゐ、志たガひて、行爲と言と、氣質もて、天ゐる神に、つかふるを、志めすべきゐり、

わガ家の、人のまへゐし、善き儀表、たてゝ見せ切ゝ、もろ〳〵の、りまづくものを、とりのけて、わガ行爲ゐ、ひと〳〵の義務を志めし、愛の道、ゐらハすべきゐ

柔わ、心やさしく、たちまちに、解てやはらぎ、わが神わ、ふたゝび、かくあろと、わが家れ人に、ふらせつゝ、皆もろとも、わ、天の道、のぞみていでん、

キリストの、きよきおん血に、きよまりて、親族を、すゝめつゝ、妻もあどもも、僕婢らも、皆ひきゐれて、天へとて、樂き道を、喜びて、進みてぞゆく、

人の交際もたゞ〳〵に罷在候へも書物をのみ、伴侶といたし居り候殊に神の愛を志るせる歌い婢の心を悦ばせ候なり然るからわ斯は長々と人の歌をひきも致し候わらはい若し成い〻數日のうちわ某れ所に到んと存じ候斯申そは事わより て來る一週の中に君わひたてまつるあとあらんとての事に候あり然あゞら君の御來臨を蒙らばわらはの父母の益をうるてと大あるべしと存候

かしく

エリザベッ、ウオルプリッ再拜

月　日

レイ、リチモンド教師閣下

我之をよゝをいりて言けるは「此書をもちきたらをしは眞わゝたしけなし御身の娘子と御身と我とわとりてい忠實ある諫者親切ある友あり請ふ御娘子にゝたりてたまへ我はまあとに其書の言わ感服いたしたり此上もあべ〳〵書面をたまいらをいよ〳〵ありがたくぞんずるあり」と語るをきゝて老人いさも嬉げに見えたるゞ涙わむせびて言語あたいず只「君よ重ゞれ御親切を感謝ゝたてまつる然は御機嫌よくあろをせ復とはゝらず御目わゝより申さん」といひて別をたり

第五章

夫神は其忠信ある信者を若き間わ此世より取たまいんとせらるゝ時ハ其人を去て神の眞理をさとる事において著しき進歩をあさせたまふなり是人の常わみるとてろわして其人れ生命のをハりわ近づくにれよびて聖靈れ結べるとてろの實早く熟するものあり殊に斯る人は其身の罪を感ずるてと深くあり救主の全き御性質を見るあといよ〳〵明らわありて謙遜の心をまそにいたる且病疾のためまた身のよわりたるがために未來の事をれもふあと屢にして其身の救の事をゐんがへ其信仰の如何をあへりみ其愛心の眞なるを思ひ其望れ清きを心にれゆるあと常あり斯る時にハ未來れ事のみ多く胸わうかみいづ

即ち死たる後の有樣天國の事死者の性質未來の審判身体と靈魂の別れるてと復生れ時に此二の復あひあふ事等を重に心にあんがふるあり是まで何程神れ靈の慰をうむりたるわもせよ是時わいたをハ其人は自已の信仰れ如何を去ちべん事を大にのゞむあり斯其信仰をためさんとする時わい隨分苦しき事もあるものなをども遂に其困難わかちて信仰をのたうす是は尙金をふきわけて純金をねたるがおとし暫く涙わて播も遠のらず喜樂をもて刈るに至らん斯る人の信心は勝ざるの喜をいだくよりハ寧平和わやそんずるものといふべし夫稻の穗はそのるに去たゞひて地わたるゝあり信者もうくのごとし斯る時ハ信者ハまず〳〵其身のたらぬとあろを感じて屢つよく之をいひあらハすあり然るゞからエスキリストによりて神の愛をふ

かく頼をてうたがいず斯のごとく死おちのづくゐまたがひて謙遜をませども他の人に益をあたふるゐとをせざるゐわらず其人い世をさるゐとの近きを去るが故に力をつくして神の榮光をあらいさんとつとめて人ををちびくゐり此事等はエリザベッけ身のうへゐ善あらいれたり彼が身の次第ゐよわりゆくい此世をさるゐとの近づける徴ゐり去が其品行行狀れよび神の恩ゐ感ずるの事はいよ〳〵光を増きたりぬ今此ゐ彼がれてした る最後の書を掲ぐべし是書ゐよりてみをむ彼が其心れ働作を善くみあきらめ去事あらいれ神の恵にまつたく頼みし事去らるゐり我此本書をうつそ時ゐエリザベッの事を目れまへゐ見るがごとくに思ひ出したり固よりエリザベッは是等の手紙をゐく時にあたりて其書が世の人の目にふるゐあいたるべし

とい夢にもれもはざり去ゐり今之を世ゐおはやけゐするい信心ふのき貧人を愛みおもはゐる者に此事を去らえめんがため又此事より去て世れ人が利益を得て悔改むるにいたらんゐとをのぞをてゐり其文に曰く

拜啓　閣下の許をねたるにより亂れ書をもはゐからず復も申しいれ候君い主エスの謙遜柔和をまゐびたまふに因て婢のごとき無知ゐる者の言も忍びてきゐたまふと信じ候婢の願ふとてろい此かずゐらぬ身をもて神の我にたまいり去恩れためゐ神の名をあがめんとする事ゐりねがいくは主ゐる神智惠をもて我ををちびきたまいんゐとを願いくは我神の愛の旗下に坐して聖靈の慰藉をかうむらんてとを我身の歎ゐらぬを知り神の凡れ物の主ゐるゐとを知ときは我よろゐ

びて神の許にいせやき「主たすけたまへ主を云へたまへわが預言者とあり祭司とあり王とありたまへ我を云て御恩の敎を知云め御愛のあらいれを見さ云めたまへ」と申してすがり候若神にちかよりてあらば如何ある樂き交を神といたすあるか眞に言葉もおよびがたし神は大あるエホバあり其名はいのに貴きかや天の使も慄ながら神の前ゐ伏てわがめをがむなり或人の言ふ天の使の長ある者も神のまへにありては其面を羽の下にかくそとあるは善くいひたるものありとおもはれ候

言ゐもたらぬ身ながらも婢は神の大ある事と其御恩を見るに云たがひて愈神にちのづゝんと望み愈わが身のはかあきを知にいたれり婢ば常に神よわが神を愛云たてまつるみと

如何ゐ少きやわが神をさるゐと如何ゐ遠きやとが神の遷身にあらふゐと如何にうすきやと申し候然はさりゐがら尙よく神につかへ神を愛せんとれがみをり候ゐり想ふに神が格別に我をめぐミたまふはわが禮拜堂ゐまゐりをる時なりとがんず會堂も神の恩と愛心の我身におよぶ道ゐりけり婢をづゝら彼處ゐわりて力をねたる事を屬ゐんじて神の恩をはめたゝゐ候糞いくは神の道ゐかたく立ち職任を善くおてゐひて神の憐をかうむるにいたらんゐとを此身の艱難の中ゐあるが中に我はキリストを云り其復生の力を心れ中にわきまへんゐとを祈り候ゐり若我つねにのくゐらむとがが身の春は長久にしてわが意い主の意とひとつにゐりて何事ゐも天の道に甘んじ從ひ絶て不足をいふ事ゐく反て恒に「主の意は

善し限りあり智慧ある者いわやまるゐとゐし」と申すゐいたるべし但しあゞら罪と不信のためゐ屢なやをて神のまへに涙をもて歎くゐとゐり如何にかゐしき事ゐらずや若神の愛ゐゞ心にのたく存して我を志て喜悅をもて萬事において神ゐ志たゞふを之せ志め且次第に此我隨の心と情と驕心の根をたつを之せ志めゐべ如何に幸ならずやと思ひ候ゐり

此事い只ゐれらゞキリストの御血にゐらひきよめらをキリストにゐりて新き者とゐりたりと信ずる其望よりいでたる者とおもいるねゞいくは我等彼救の力および彼長久れ愛の源よりわきいづる治療れ流の德を証しするものとゐらんことを閣下よゐゞ信仰い屢おはいゐ薄くゐる君請ふ之をつよむる道を志らせたまへ婢志べ〳〵思ふゐ神は明らゐ「汝たゞ

信せよ然べすくいれん」といひたまふ神は何事をもゐすを之たまふ唯信仰われたよし如何にも志て此神の恩をさまたぐる所の山々をうつすことをうるにいたらんと願ふ心まゐとゐ切に候ゐり若志のするを之べ聖靈ゐよりて善く神ゐちゐづくを之て親くましいりたてまつるを之ん神い此蟲のごとき者に廣大ゐる恩をはどてしたまふ然るに我等いゐは不平をゐらしつぶやくをゐのむいいのなるゐとゐや神は此不忠ゐる不義ゐる者のために愛情をつくしたまふ此上何をゐ望むべけん我い此上キリストをうれへ志めざるやう願候請ふ此事につき我ゐ力をゐべ神ゐねゞひてたまいをよ嗚呼まてとゐ神を愛したてまつる者をゐるは如何にたれしき事ゐらん抑此世にありて眞の信者と交ることい眞に樂しき事

ゐれども之を天國にて神をたたてまつるの幸福に比それば如何ぞや固より較ぶべきものゐあらず若我等キリストゐよりて天國におもむりば神の御位のまゝりにしべる天の使つれだちきたりて我らをむかへいるべし夫エスキリストハ十字架れ苦を玄のびたまひて遂に榮光をうけ今は父神れ右に坐したまふ婢も及ばずゐがら十字架をとりて勇しく戰むんとねがひ候君が婢のごとき者にも書面をたてまつるゐとを許したまふゐよりて禮謝したてまつる此身ハ日々におとろへゆき候へども斯君ゐ思想をれぶることをうるによりて苦痛の中にも慰を玄申し候ゐり請ふ君よろてびて職務をとげたまべ神ハ恩惠れ源本なをば諸の助を君ゐたまふべしねがひくハ君が其神に感謝するに至りたまハんことを思ふに

君ゐハ定めて快活らぬ事ゐいでゐひたまふ事ゐ玄ならん去ゐがら斯る事も神の助ゐよりて終にハ利益とゐるものゐり是をゐ人をして誹ら玄めんがためゐ神のゐさるとゐろゐり然ば君が日外もれがたられし困難もきえうせ申そべきゐり婢の父母ハ身体達者ゐまゐりゐり候又エスキリストを知て其愛と恩にうるはふゐらんと信じ候是をしらぬ命もながらへたくおもふハ偏に父母れためゐ候ゐり顧みれば御目ゐのふりてより已ゐ久しく相ゐり候是のごとき賤しき身をもて君に來臨をねがふハ恐をいりたる事ゐ候へどもねがはくハ訪たまへ若また其事にさしつゝへゐらゐ書面なりともたまハれよ請ふ斯拙なくつゝりたる亂筆をゆるしたまへ婢ハ書をよむことハ務め候へとも文字の方ゐハ心をもちふ

るの力あく候時々婢い君の教會にて感化せらるゝ者あるを聞てよろゐび候君も定めてよろてべるゝならんねがはくい

キリストの福音天下あまねくつたいりて世の人ゞ背主をゑり主をおろれ主を愛そるにいたらんゐとを聖靈天下の人の心をむそびあいせてキリストゐありて一致せゐめたまい

ん君の最よろてゐるゝ所い神の榮光のために働きて人の魂靈をそくふの事ゐるべし君の主は善者ゐいませばゐらず報をたまふべしねがいくは神君に力をゐへたまいんてとを婢の父母もよろしく君にまをしあぐる樣たれを候請ふ君ゐの數ならぬ者等の微衷をいれたまへゐしく

月　日　エリザベッ

是誠に感ずべき文ゐりけり眞實をもて書たる書い心を描す眞

画ゐりといふべしねがいくは此書の世に大ゐる益をれよぼすにいたらんてとを

第六章

遊歴者田舍をとほりやく時森や野原の中に大なる家屋を見るにあたれゐ是ゑ何人の館ゐるやとたちとまりて尋ぬる者にて其人の遺緒稱號富貴性質等は之を心ゐうんゞへ其室と器具庭園等の如きは之を感稱そ又其主人の官位や富や風流の如何のごときも皆論談するの具にあらざるはゐしゐれども貧しき農夫れ小屋は見るゐたらずとして過やくゐり然ゐゞら其草屋の中には富貴の人の第宅よりも遙に貴きとゐろの寶れあらんもゐるべうらず若ろの無價の寶貧人の心の中ゐありたらんに

と其人は終ふキリストのために榮光をかゞやかそにいたるべし是あに貴きことならずや是ゆゑにキリストを信ずる人は常れ人のごとく富人の莊嚴をはめ其家れ美をのんぜぬわはわらねども亦貧人の草の廬をも見すぐしわせざるゐり若まことの信心富人の家にあらずして貧人の小屋のうちわ存するあれば其人は神の言をれもひいづるゐり即ち其人い彼永遠にいまして崇き聖き宮にすをたまふ神ゞ貧き者の心にも亦すをたまふを見て感歎するゐとのぎりなし夫神は天を其位とし地を其足と發とをたまへども其すをたまふ宮をたつる時にれゞをてい「我と貧くして心に悔をいだき我言をきゝて慄へる者を求む」と言たまふ(イザヤ六十六章二節)斯る信心者の住る家の壁には「主此ゐすをたまふ」といふ銘ゐり故に信心れ人とゐを見すぐしに

そるわたいず其戸をあけて内ゐいりて其主人と談話するをゐのむ其主人の貧きと賤きとはかへりみるとゐろゐわらざるなり斯ある時は其喜れはいゐり我も彼牛乳屋の草屋にて樂き談話をゐしたることと歎おはりき

却説牛乳屋の女エリサベツは身体大によわりきて色わをざめ目くぼみ咳はゐえだしくして迎も此世の者とは見ねざりけり夫世にい肺病にて長く患ひをる者おはし是みゐ敎師たる者及びキリストを信ずる其友ゐどゞ力をつくそべきとゐろゐり然に此好機會をおろろかわするゐと多きは如何わうゐしき事ゐらずやゐゐ平和の道を去らざる者幾何ゞや若未來の罰をのゞるべき道を去めず人なくをいりわしてゐ其人平和の道をゐらん幸ゐしてエリサベツは此病わのゐるをへに已わ平和の道を

志りたり吾彼をたづねたる時已を之を彼に志らするよりはむしろ之を彼より聞く事おはかりエリザベッの心おは神の道のをちをりて其言む眞わ益わり之をおもひ出せゞ何時もわりゞたくおぼゆるあり我一日短き書面をうけたるゞ其文おいゝくく

拜啓　閣下もし來りて此ゝ志ずあらぬ罪人を見まひたまゝ幸甚おゞんじ候婢む早長くゝ此世おわるまじくれば之候なり君の談話い志ゞ我わ益をわたへ候今ゝわらゝ尙ひときむ御勸をゝうむらんあとをのゝを候あり以上

月　日

エリザベッ

我其日れ午後に彼れ家をたづねたり志ゞ近づくにおよべる時老婆いできたりて戸をひらき頰わ涙をあゞして其頭をふをり其心いつばいわしして言んとして言えざり志あり是をを我老婆の手をとりて言けるやう「わゞ善友よ事をあよし智慧と惠慈のみちたる神のあさるゝとあるゝに惡き事はあらず」老婆云ふ「嗚呼わゞ息の緒わも思ひたるエリザベッはまてとに衰へ候彼あく心何もいたしゞたし彼よりも先に墓おいらんと思ひ志にといふをついで我云ふ「神は老婆ゞ死るまへに先娘の安然に天國にの〻へるを見といくることを善と志たまへり是仁慈あるにわらずや」老婆云ふ「君よ我は年老て弱り候エリザベッゝ此老の身れ杖とも杜ともたのをたる者に候あり」茲に我進みゆくにエリザベッゝ圈手椅にのゝり枕わもたれて火の側おをり志ゞ其容顏やせおとろへて死期もとはのらじと思ゝをたり彼わゞいるを見て微笑をふくみて言けるやう「君はわらゝゞ使者をあげたるのゝ斯すみやゝに來ましたり眞にありゞたくゞんじ候此身

は日々わやせおとろへもさて迚も長くの世わありがたし吾肉と心のおとろへゆけど神の吾よわき心を強くしたまふ」のくて談話におよびしがエリザベッの時々咳をなして言をとゞめたり又息のつゞのぬ様わも見うけられたり其聲の細けれども明らにして其様子のおちつきぬたり其目の以前よりも朦々をどもるは十分とたちきたり、我の彼が用ふる語の高尚なるわ驚き又彼が聖書の教にくの志きわ感じたり彼の生れつき智き者ゐり志が思によりてます〳〵智慧をましたり我エリザベッと老母の間わ座を志めをりてエリザベッわいひけるは「御身の神の目れまへわあるがごとくに思ひて全く神わよりたのむを えらるゝあらん卽ち其神の汝と共にいましし汝がゆくとゝろにて汝をまもり汝を天國わみちびきたまふ者ゐり」彼言ふ「君よ想ふわ我

は然するをえん近頃わが心時と志ての迷ふわとあり是全くわが身のよわりたると惡魔のさまたげとによるなり惡魔我わ告てキリストは我を愛したまいずと言ひ我の迷へる者ゐりと言て我を志て神をくなれ志めんとす」吾言ふ「御身の是まで多の恩をうむりたるも尙うたがひて惡魔れ言を信ぜんとせらるゝや」彼云ふ「否嬶はキリストの愛心の明証をたもつてとを得るなり吾身己に多の罪あるわ今又キリストれ恩を無ものと言て罪の數をますべけんや我キリストの愛をとめてキリストをわがめたゝへまつるなり」吾問ふ「御身がキリスト教にいらぬ前の有様はいかゞありしや」答ふ嬶は衣物や飾品に身をやつしたる者わして何の考もゐくまゝりわり只世を愛し世の中の物を好みたり且又嬶が奉公にゆきたる家は皆不信者わ志て神を拜す

るの事をなさざりければ僕婢も亦おのづから其風あらひを
り候然るに或日曜日に我會堂にまゐりたり是は神の言をきゝ
んためにはあらず見たり見られたりせんとてありき其までは
我い救はるゝわ足るほどの善者ありと思ひゐたれた信心の人
をきらひて之をわらひたるあとともありて全く黒暗の中わまの
りあり候救の道とても更に去らず祈はせしあとゐく祈をせぬ
あとの恐ろしきをもまらずして只善き婢といとをんあとを志
ざしてをり讃らるゝあともあれた誇しく思ひたり尤も我は此
世の慾にむされを心をもちひず去て行狀も隨分よりあゝ神
をを更にあらずキリストをたすけしも思はずにまかりあり候
斯わゞ心をれろうのにあしたれた若彼時に死たらばうならず
地獄わおちたるなるべし」吾とゝふ「御身ゞ始めて說教をきいて神

のたすけにて終にキリストにうへるにいたりたよより己來は幾
何なるや」答ふ「五年わ相成候」問ふ「其事は如何におありたや」答ふ
「殖民地へ教師とゐりておもむかるゝ某の君ゞ逆風にさゝへら
れて舟出をるをえずして留られたにより て此にて某れ會堂に
於て說教せられんとをると聞たれば往んゐとを思へり時わ多
の人ゞ我をとゝめて往ざらためんとたりたゝのども婢は其言
をきゝず我身の美服を人にためさんとおもひて遂に主人れ許
をうけて彼處にゆけり其ゆける心は面白ゝんぶんにてゐくお
ろゐるものありたかと神はうくのごとくして我をちびく
を善とたまへり婢乃ち會堂わもきたるに衆の人其處にあつ
まりゐたり我は彼時わゞ心れ始と終とは大わ異ゐる者とゐり
たを思ひいだし候始暫くのあひだは神の禮拜にはかまいずし

て四邊を見まわし人を去て此身を見せ玄めんとせり婢ゞ其時の粧束は身分わてえて美しき者にてわり罪を感ずる謙遜れ人の着るべき衣服にわらずわゞ心の愚かるゝと其衣ふよりて玄られ候ゝり茲に教師聖書れ言をよみ「汝等謙遜を着よ」と言をて身の衣と心の衣をくらべて訓れたり其説教の始わ於て婢は既に衣服に身をやつす事の愚なるをさとりて愧いり候ひ玄ゞキリスト信徒ゞきる救の衣れ事をきくふ及びて始て此身の裸なるを見玄りたり我は其聖書れ言にみゆる謙遜もあらず又キリスト信者の性質さらわなりり玄りゞ衣服をかへりみて愧いり候茲わ教師をみるわゞ目をひらくために天よりつかゝされたる者のごとく見えたれゞ會衆の中わも我と同き感をいだく者ありやと見まわし候我心をみるに不義のみみちたれを教師

のかたるゞまに〳〵慄ひたり玄ゞ心はおのづゝら其言れ方ふおもむき候彼教師は神ゞ罪人をすくひたまふ其恩のゆたゝなるを説きたり我是をきゝてわゞ是まで何をなしあたるかを考へて驚きたり教師またキリストの柔和謙遜を説れたをを我此身の慢心おはきに感じたり又キリストを智慧と説れたををわゞ身の無知を感じ候又キリストを義ある者といれたををわゞ身の不義ある感じキリストを聖き者といをたをわゞ身れけゞれを感じキリストを順者とゝかたれゞわゞ身れ罪の奴ゝるを感じ悪魔にとらわれを感じたり教師は未來の罰をさくるゝとを切にすゝめ外貌の飾をすてゝキリストを着訓遜をまとふてとをすゝめて説教をゝはられたり彼時より去て我わゞ心の貴きを忘をず罪の恐るべきを思ひ竊わ神をわゞ

めて其説教をよろゐび志げわが心は尙さだまらずにあり候誠
にの教師はわが心の嗜欲をあげて論ぜられたり其欲はすゐ
いち美服を着るの事に候幸ゐしてゐれがために我は魂をひき
おゐしたり若他のまづしき女子もわがごとくに朽る衣服をも
とめず志て朽ざるとゐろの衣即ち柔和謙遜を身わまとひゐべ
如何に幸なちずや神はゥるる衣をたふとびたまふゐり併し其
時の衆會はゐくのごとき熱心ゐる正き説教をきゐ志ゐとゐき
が故に多は説教者れ嚴しきを彼是つぶやけり其中數人わがで
とく感じてふたゐび其人の説教をきゐんとねがひ志が其方は
ふたゐび説教せられず候其時より婢は密ゐ祈をし聖書をよみ
且ゐんがへて終にゐの身の罪ふゐきを志り神れ恩を志るにい
たれり即ち神い數あらぬ罪人をあげて天國ゐいりて榮光をう

くるを之せ志めたまふ嗚呼いうゐる貴き救主ゐや其恩身にあ
まりてゐりがたし神の恩ゆたゐにして貧しき婢れ求むるとゐ
ろを滿足せ志む我は神の懷にいりて罪と悲をけがれ神の言に
よりて疑をはらし不信をのゐ・けり」我とふ「救はまつたく神の恩
によりてたまいる者にして御身の善行などの能く之をうる者
にあらざる事を直に理會せられざり志や」答ふ「君よ彼説教をき
くまでのわが行は只惡しき事のみわが心の思想はとじめより只
けがれたる事れみわが行迹は只に墮落志たる人の行迹のみゐ
り若すくはるゐあらば是は全く神れ恩による者にして其榮譽
はみゐ神に歸すべきゐり是事は早くよりさとり候ゐり」我とふ
「其後は世を何と見られ志や以前と異ゐるゐというゥなり志や」
答ふ「世は眞に浮世にして凡の事は皆心をゐやまず者ゐるのみ

心の平安をえんには世の事をすてざるべからずと思われ候我は常々祈をなして樂く神とまじわりまた屢わが罪をおもひて歎きたり然ながら不信や恐懼のためまた以前の惡き路にかへらんとする心のために時と志しては困難の場合あるを志ゐともあり然るに我を愛したまふ神其情をもて我をみちびきて平和の道を我に志めし遂に我を志て新ある度世をあすに至らしめたまへり我は神によらねば何をもなすをえずといへども神の力によれば何事をもなすをうるなり是事も神にまゐべり」我と云「御身は悔わらためたるがために困難にあひ志てと多かり志や」答ふ「然り君よ日々ゐ困難にあひ候人ゐ笑はるゝやら罵らるゝやら嘲らるゝやら種々にてありき人我にいろ〳〵の名をつけて世にいまるゝ樣にいたし候偽善者とか聖徒とか迷者と

か我をよびたるもれ多し然と我は十字架のために恥辱をとるを名譽とおもひて我をなやまそ人をとがめそ反て其人のために神にいのり我も近來まで斯人ゐり志とおもひて之をもるし候且又キリストは罪人のろ志りを忍びて受たまひたれば我はキリストの苦ゐならふてとをよろゐび候是弟子は師にまさらぬによりてあり」我問ふ「其時御身は家の人の事をおもひたり志や」答ふ「然り君よ我は家族を片時もゝすれず之がために常に斬りたり殊に父母は年老て且敎の道ゐくらゐりゐれば之がために心を勞志たり」時に母言をいだして曰く「誠に志ゐり此子がキリストを家ゐ案内しきたるまでは我等は無知れ罪人なり志」といふを娘はいひあはして「否母上よエスキリストが娘を家につゐいして父母をそちびの志めたまふなり」といへり此時牛乳屋

の老人乳桶を肩わかけていりきたり戸の側にたちて今女と妻のいひたる言をきゝて言けるは「嗚呼ねがいくは恩と幸娘にのゝめ其事は眞あり娘は善奉公先よりさがりさて我等とをりて我等が魂と體をたそけたり君よ女は甚だあしく見ゆるゝあらずや迚も長く世にをるまじ」娘いふ「其事は神にまゝせられよ我等の時は皆神の手にあり是幸の事あり我はよろゝんでゆく父はいゝにゝや我を始に父ゝあわたへたまひし神ゝ今我をゝへそを父は甘ぜられぬや」父は泣ながらいふ「其外の事は何ありと問へ其事ばかりは言てたまふる」娘いふ「父は我を愛して幸あれとねがはるゝは我去る」父いふ「去ゝり去ゝり主の善と去たまふにまゝせよ」時に我エリザベッにむゝひて今死に近づくにあたりて其慰藉は重に何あるやをたづねたり娘いふ「全くキリストを

みたてまつりて慰をうるなりわが心にあるキリストの像を見んとするに多の罪あど之をおはひて明あには見えねと救主をみたてまつれとまことに愛そべくして其面に一點の曇もあらず去て眞ふ全し我はキリストが肉体とありて來ませるを思ひて此身の苦痛を去のぶ其はキリストも我おとく苦をもちたまひたればあり亦キリストの誘惑にあひたまひしをおもひてキリストはわが誘はるゝ時に助けたまへんと信ず又キリストの十字架をおもひてわが十字架を去のぶ又キリストは死をおもひてわが身も罪について死て罪は管理をまぬれんとねがひ候又ある時はキリストは蘇生をおもひて我もキリストの恩によりて然ちんとおもふあり重ふ我いキリストが父神の右にいましてわがためわとりあし吾ためとわが父母のためふわが

さゝぐる祈を神にすゝめたまふと思ひて慰をうるありわゞ救主の仁惠をそるゐとのくのごとし是によりて我は此貧き路をもてキリストゐつかへたてまつり此身をさゝげてわゞ務をつくさんといたし候若キリストれ助るくべ我は幾千回ゐふゝまよふらん嗚呼キリストゐくべ我は何をもゐすを知ず我はわゞ重荷をキリストにまゐらせたてまつる間はキリストの御意をなすをうるゐり

願くは御恩によりて死ぬ時までキリストにたのみたてまつるを之んゐとをキリスト死の刺をとりのぞきたまひたれべ我は死をおろをず嗚呼未來の福祉はいゐゐや君はいゐにおぼさるゝや我は誤りてはをらぬか告たまへ我は迷ひはをらぬと思はるわゞ望はキリストの十分の恩ゐるれを外にも何もゐしわ

ゞ心はたのまれぬ者ゐれべ心に物を問ふ時は之を信ずるをはゞのる然をともキリストに問たてまつる時はキリスト我をもげまして其約束をたまひ我を去てキリストの救の力を疑ふとてろゐのら去めたまふ我はキリストの手にわり長く其處にとゝまるをねゞふキリストは決して我をすてたまいずキリストは我を愛して其身を我ゐあたへたまふキリストの賜物は悔ゐきれ者ゐり我は此望をもて生きての望をもて死んとねゞふ時に我四方をみまいして謂らく「誠ゐ是はすゐいち神の殿の外ゐらず天の門ゐり」とおもへり家の内萬奇麗にして善し此日はくもりゐたるゞ其時にあたりて急ゐ夕日の陰室にさしゐみてゝらしかゞやけり此日の光ゐんエリザベツの榮光にいるの徴候ゐりける時ゐ日の光鏡ゐうつりてエリザベツの面に映じたり彼

は青白てやせおとろへたり去り其中わおのづから廿心謙遜信仰の貴き風見てまゐとに殊勝ありけり是より尚去べらく談話あて終わ短き祈をもてわひわのれ黄昏に馬をとやめてうへりけるり其途の景色幽清にして眞に心耳をきよめたり今圏牢にいりたる家畜の聲處々わきあえわたり夜れ蟲の音は早くもすだき海の波音はのすのに響き鳥は棲居をたづねて鳴き子規は空ふ歌ふ其ありさま言んのたあし夫世の景色はキリスト教の鏡にうつして見る時は皆善く神の眞理をときあのす者あり我等其景を愛翫し其につれて神ふ近づくにいたらは如何ふ幸あるらん

第七章

此地の多くの處に神をあらざる者許多ありて其様あいれなるり其中ふも神の民あるは如何にたのしき事あらずや世にい屢貧賤の人にして神の恩をのうむりて終ふ救にいり祈により又聖書をよむ事によりて神と去たく交りたてまつり熱心のキリスト信徒とある者あり斯る人々をのへりミずふ打棄おくて多きは今日れ教師たる者の誤あり或教師等の説はあまりふ泥を過るとみろあり其説は殆と欅楓に類を若其輪と樞軸と鏈と鏇車等り規則をはりにゆのぬ時は其全體を棄て見にたらずとす但し幸ふして主はおのをの者を去りたまふ主は彼世の交際もうとき身にてきリストの名をとなへ悪をさけて善にうつる者にも亦其印証をたまふなり或人の歌ふ

可怜さよ深山の奥の櫻花見る人ふしに散やうすらん

とあるグキリストを信ずる人の中にも是れごとき者往々あり但し牛乳屋の女エリザベッは全くのくのごとくはあらざりけり彼は世をはゐれ居て道わ進み人に云らるゝてと少くり云グ生るあひだ世ふ利益をおよぼし最も幸ある様に世をさりて誓明き迹を世にのゐせりねグいくは吾其事をのきあらいを時に其感化をうけ神の恩によりて彼信仰と忍耐をもて神の国をつぐを之たる者に従グふをうるに至らんあとを是わが願なり前章に云るしたるごとく我エリザベッを尋ねたるグ彼の最後は程とはのらじと其時より思ひゐたるわ一日急に呼使者きたれり其人は兵士にして信仰のふゝき者あり其人云く「君よ我はエリザベッの父母れたのみによりて參りたり皆大いに君を見んてとをねグふ君よエリザベッは今已に死んと云て居る」我と

ふ「子は長くエリザベッをまらるゝや」答ふ「一月ゐのりゐり我は彼病人をたづぬるを好む陣營の邊の人に彼の事をきゝて訪ねたりゐグ大に益を之て眞に嬉し」我いふ「子は我とゝもに働く兵士ゐり我等たとひ外わきる服はゐとゐるも俱にキリストの下知により騎いだしける彼兵士はわグ側わつきてわゐみ種々の善きて働く者ゐり去來君と共にゐかん」是に於て馬に鞍おき話をゐして我をよろゐぺせたり其中に彼エリザベッの善き心志をもものグたりていひけるやう「エリザベッは光り耀く金剛石のごとし遠ゝらず世の金剛石よりも光りゝゝやく者とゐるべし」斯うちゝたりて我等二人は小徑をわたり野をを沱岡をて之谷をとはりて進みゆくに處々に川れ流ゐりて潺々と音清くきゐえたり餘りゐ談話の快さに途もゝりぞりて早くも牛乳屋

れ角にちのづきけれど此にて談をとゞめ長逝の事救拯の事あ
とを心におもひて他事あのりき其邊には生物とては更にみえ
ず只牛乳屋の犬ゞ無言にて番をいたしをるのみ彼犬は主人の
家れ憂を去ると見えて常のごとくは吠もせで門をいでたり
て我等をむゝへまた家をゝへりみて異も心ありげの所爲を
見せり玆に彼兵士わゞ馬をとりて小屋につゐきたるゞ誰も物
いふ者はゐくして最も志づかなり唯家れ庭ゐる大楡ゐろよ〳〵
と吹あたる風の音の嘆の聲とまゞふばゐりにきゐえたるのみ
我ろろ〳〵と戸をあけいりて階梯れ下ゐいたれば兵士もあとに
つきてきたれり時に二階ゐ聲ありて「彼の方々は來ませり來ませ
り」と云ふ是父の聲なり彼すゐはち來りむゝふ我一禮をゐして
言ずに室ゐいりて見るに母と子息とはエリザベッをさゝへて

をり子息の妻は子をいだきて啼ゐたり其外二三人の者室にゐ
りて用事をゐさんとまちつゝふをる我すゝみて床の側に坐した
るゞ老母はゐまりにうれへて啼てともゐせでエリザベッと我
をゐいる〳〵にうちまもりて唯太息をつくのみゐりエリザベッ
の兄弟も涕をゐゞしてをるは愛情のふゝき証と見ゆ又老人は
床の後にたちて柱にもたれ須臾も目をとゐるさずに娘をうちま
もりエリザベッは目をとゞゐてまだ我をみずにゐり志ゞ其
面と青ざめて痩くばみたれども言にいとれぬ神の平安のあら
いれて誠にたふとかりき玆に兵士聖書をとりて前コリンゞ書
れ十五章五十、五六七を我に志めせり因て我其文をよみゐげた
り文にいとく「死よ汝の刺はいづくにあるや陰府よゐんちの勝
はいづくにあるや死の刺は罪ゐり罪の力は律法ゐり我等を志

てわゞ主エスキリストによりて勝を之せ玄むる神に謝そ」とよみあぐる聲にエリザベツい目をひらきたるゞ神れ光や其面にりゞやくあらんと見えたふとうり彼そあいち「勝よ勝よわれられ主エスキリストによりて得る勝よ」といひて復目をとぢたり時に我「信仰の勝利れためわ神に謝すべし」といひければ兵士「アーメン」といへり牛乳屋の老人目をあげたるは「アーメン」をいはんと心におもへるあらんとみえたれどもあまりの哀さに口にはいひいださゞりき其時エリザベツ絶々の息をつぎたれど我かれわいふ「エリザベツわゞ友よ御身は神の助をうけをるとおもはるゝや」エリザベツいふ「玄うり神まことに我わ情をかけたまふ」我とふ「神の契約は今御身にとりては貴のらずや」答ふ「おん契約は皆エスキリストによりて成るあり」問ふ「身体わ痛苦を

おぼえらるや」答ふ「まことに少しなうりにて忘るゝはどあり」問ふ「主はいりに善ましまそゞや」答ふ「ゞ身はいのに直なき者あるゞや」我いふ「おん身はどはうらずキリストの本體をみたてまつるあらん」彼いふ「我は玄うおもひのゞむ必ず玄のらんと信ず」とかくて復ねむりにつきぬ我すあいち老母をのへりみていふ「老母れ女のごとく天國に近づきをるものを子わもつはいゝに幸あらずや」老母かあしげなる聲にていふ「若この老母女わ玄たゞひて彼處にいたるあとをえべいのに幸あるらん君よ別はつらく候あり」我いふ「おんみは信仰をもて恩によりて遠らず女にあひて再はあるゝことあきにいたるべし」老人側より言をいだしていふ「其事をおもひて我はみづからあぐさめ候まよとに神の恩によりて我は今は平和をおぼゆるあり」時にエリザベツ目

をさまして言ふ「父よ母よ神は我に甚だ善まします神をたれみて長に神をあがめたまへ」と又我わむかひていふ「君よ御親切を謝したてまつる我は君にねがふ事あり君はわが妹をはうむりたまへり請ふ我をもはうむりたまへ」我てたふ「神ゆるしたまへ萬事おん身れ望のごとくすべし」エリザベッ又いふ「ありがたくぞんじ候復外にねがふてとあり請ふとがなきあとにて父母をのへりみたまへ父母は年おいたれども己に心に神をみとめたりわが祈はきこれたり請ふきたりて訪たまへ婢は長はものいれず請ふ父母をうへりみたまへ」父母は之をきいてむせびあき種々くと悲歎の情をのべたりけり玆に我エリザベッにとひけらく「御身は救る〻事あつきて何のうたがふ所あるや」答へけらく「否云のらず君よ神ふりく我わ情をかけて平和をたまふ」我

またとふ「御身は今死れ暗き谷をとはらんとす死の暗き谷をいうに思いるゝや」エリザベッみたふ「其は暗くいあらず」我とふ「何ゆゑに」てとふ「神其處にまします神はわが光わが救あれべあり」またとふ「御身の體にはあは痛あらんとおもいるゝや」みたふ「神われをふりくあれれみたまふわれい神にたのみたてまつる」といふ時にあたりて少しく体のつるごとく見ゑしが其もあはりぬ其よりエリザベッ頻に「神ふりく我をあれれみたまふ神よわれは神の物あり救ひたまへ尊き救主エスよエスの御血我をきよむエスれ名はありがたく殊勝ありエスは勝をあたへたまふ我はすくいる神よわが靈魂をうけたまへ君よ父母よ朋友よ我は今往んとす但し皆善し皆善し」といひてまた睡につきぬ是において我ら跪づきて神にいのをり神われらの中にありてめぐみ

たまへりエリザベツはわゞをる間は其のち目をさまさず又解る言葉をいださざりき彼十時ごろ時ごろうりもねむりて終に氣たゑ神の御手れ中わいりぬ我は彼ゞねむをるのち一時ごろのりわりて家わかへれり歸るわあたりて「キリストは復生あり生命あり」といひて彼の手を握りゑに彼もやはらゆに答へたり然と目をひらくをえずまた言をいだすをえざりき斯のごとき感ずべき死は他に見してとあらず嗚呼感ずべし感ずべし

第八章

抑信者の靈魂ゞ此身をとゑれて神の前わいたる時に感ずる所の變化はいのゑる者ゑるや誰の之を思ひはゆるを之ん神れ愛と智慧は玻璃をとはゑて朧に見る時そらもゑは樂くありて若し

面をあいせて見ゞ神れ榮は如何ゑらんと思ふはとゑり若此世にありて聖徒とまじわり同信者とのたらふ事の貴くありゞたく思るゑゑらゞ後にレオン山にいたり生る神の邑ゑる天のエルサレムにいたり無數の天の使とまじわり天に錄れたる彼長子の會にのゑみ萬の人の審判神ゑる主にいたり義をまつたうせし人れ靈魂に就き新約の中保エスキリストの御許に參る時は其事いかゑらんや若此世の旅途をふる時に歎きと涙のたえまゑきゞ中に聖靈の慰をゆうむる事まゑとにありゞたく思われ未來永世の望實に樂く思いるゑならゞ彼歎と涙のうせさて限ゑき樂をゆうむるの國にいたらゆんゞや我エリザベツの家をいゑれてゆへる道すゞら斯のごとき思想をゑせり前の章にときたるごとくエリザベツはわゞ歸りたる後入しゆら

すしてみまゝりぬ彼の葬式はわゞとりおてゐふ樣に又も其ゆるしを處の牧師より受たりけれゞわゞ執おてゐふ事とはゐりぬ之をおてゐふに當りて樂くて又悲き思あまたおてれり先われ是までエリザベッと云ふくいたしたる大切なる談話をおもひおゐし其事れもはや此世おゐしゞたきをうれへたり又貴き賤きおかゝいらずキリストにおける親と交誼はありゞたき者ありと感じてエリザベッとおれまでまじいりたることをよろゐべり而して此身ゞもはや重てかの生命の河にわくまで飲たるエリザベッよりキリスト教れ眞理をきくを之ざるを思ひおのれのためにゐげきたり然をとも「彼は天國にいりたるゐれゞ豈之をよびかへそことを願ふべけんや」とおもひゐはして又ゐぐさめり時に鐘をつく音たかくきゐえわたる是ゐん牛乳屋の

村にてエリザベッの葬送を報ずる者なりける其村は山の下にあり我山れ上をとはりきたりて聞に鐘の音まことにいふにいはれぬ趣ありて一にい神を信じて死たる者の福祉をつたへ一には世の無常を報じて皆人に是おもへやといふゞ如くにきゐえたり茲に四邊をみまいすに其景色いと幽清にして心をあづめて神のゐとを思ふに適そ先膏腴ゐる平地山の下わよゐたいりて麥田や草場等一面に之をおほひ其中わ彼此とゞゞりたる河ありてなゞれ其岸には羊の群ゐまた草くひをる對面をゐゞむれゞ連山ゐゞくわたりて海につきいで其上に羊ゐど多ゐろびをる見ゆ又海の水も碧をなして遙に見えきたる且またろの平地には處々に村や會堂のたちをりて其中に富人の大厦と貧人の草屋といりまじりたるは亦一景ゐりけり此日天氣のとか

にて西にかたむく日の影山をてらして又一層の美をろへたり此景れ中に最も意にとまる者は彼エリザベツの葬送を去らそる鐘の音ありさ

若之をよむもの吾のく細のに去べく景色をのぶるをあや去みて其故をとはゝ答へて言ん夫世の罪をあがゐふ神は亦萬物を造りし造物主ゐり神の言わよりて考ふるに神は人を去て天地萬物の美を觀察去て其敬虔信心をまさ去めんと去たまふダビデは神の御手の作なる天と月と星とをかんがへて大にろれ身を卑下し造物をたふとみあがむるゐいたれり又ダビデ羊牛野獸飛鳥および海の魚を觀察去て「エホバよわが主よ主の御名は全世界のうちに如何に尊くおいすろよ」といひいでたり

我は貧人の友ゐり貧き人々が萬物の中にみゆる神の仁惠と罪人をそくひたまふ神の恩典をあいせて考へんてとを望む田圃にいでゝ勞する時に四周をそまいして考へみよ何物ゐ神の仁惠をあめさゝらん我はゐる觀察によりて樂と利益を得たれを讀者のまたわれとゝもに其樂と利益を享られんてとをねがふ却説牛乳屋の家は會堂をさるてと半里ばりの處にあり其道には樹々おひのぶさりて薄ぐらければ斯る時には一層悲哀をろふるゐり我ゆきて家にいるに其近邊の信者等數人きたりる是人々れ中エリザベツとろれ病中に懇意にありたる者多し皆エリザベツの德を感賞せり茲に親族朋友等見をさめに死顔を見んとて其室にいりけるが我にも來みよと乞たれを乃ちいりぬ但し其死顔を見たる時の心持はいふにいいをぬ所あり

わが友エリザベツい已は其土の体をいなをてさりたをべ近く

はあれど尚とはし嗚呼最貴き其靈魂は空蟬の身をぬもぬけて天つ國にとびてさりけり

始て見る時は眠りをるゝと思れ善く見れも息のかよいぬもゝらる是に於て忽ち彼ゞ其久くのゝみし天國にゆきしゝとを思ひいづ茲に目を閉ぢ思をひろめて考ふれば此靜寂ある室れ中にい天の音樂きゝゐるゝと思れたり又目をひらきて其青黑き目瞼と寒き唇を見れば此地の事れ心にうゝみて己の身をかんゞふるにいたる我等死と罪と墓とを思ひみるときに自と心に「嗚呼われら義人のごとく死んゝとをねゞふ」とゞ終を云て義人の終のごとくゝらゝめんゝとを願ふ」といのりたり眞に信者の屍骸をゝさめたん棺の側にもく時はキリストと救と死と審判と天國と地獄等れ事を深く考ふるに至る者ゝりエリサベ

ッの容貌は天にゝいりたるゞ尚其形に變らぬ所もありて生るゝ樣にも見うけらる、父母い頭の方にをり兄弟い足の方にをる父は默然として娘の死顏をゝゞめてい復天をのゝみたるてと屢ゝり其神の意にまゝせてゝきらめんとそる樣面色にゝられたり斯して父は涙をもて其悲哀をのべたるゞ母もゝゝゝじくむせのべりて娘の別をかなしみたり可憐といふも愚なりけり時に一箇の奇麗ゝる女我ゝちゝよりていふ「君よ是は哀歎より

エリサベッの身にとりては

は反て喜樂れ樣といふべしわゞ友

必ず云ゝるべし彼は諸の悲をとはりゝせり君は云か思れざるや」と答ふ「わゞ見たり聞たり云て知とゝろによりていへば

エリサベッの體は此にとゝまるも魂は天ゝおいて救主とゝもにゝるゝと疑なし彼は此にて救主を愛したるゞ今も彼處に

て神の右ゐある限あき喜をうくべし」母、親涙ゐむせびていひけるは「嗚呼、嗚呼、老耄れ此身をいとゐせん娘は長逝ぬエリザベッは沒ゑぬ嗟、復とはあれじねがはくゐ神我に仁慈をはどゐしたまへ」とゐさけべは我ゐれをなぐさめて云ふ「御身が今申されたる其最後の言によりて御身ゐ終に天國にて女とゐふに至るべし老母よ其言によりて數千の人神に歸して榮光にいりた り御身の娘も亦ろの言によりて天國にいたれり御身もゐるち ず其によりて彼處にいたらるべし其言も貴き祈ゐり神も歸そ る者をそてたまゐず」時に牛乳屋の老人いひいでけらく「老婆我等も娘の事を神にまゐせん亦此身をもおゐじく神にまかせた てまつらん神あたへて神とりたまふ只神の御名をてろゐがむ べけれ我等も違ゐらず世をさる身ゐれば其時にいたらを」と後

いひえずて涙ぐむ其時彼兵士聖書をさしだしていふ「君よ會堂にゆくまへに請ふ聖書をよをたまへ」と乃ちゐのせり其文はヨブの十四章ゐりき皆ゐづまりて聞ゐたり讀をいりて少く其事につきて談をゐしてエリザベッの身にときおよぼせり兵士ゐる人そなはち言けらく「我はまづしき兵士にして日用の衣食の外にゐ所有とてゐ此世にゐし然ども假令此世の物を數ゐぎりゐく受るとも未來の救れ望を世れ物にかへてすつるがごとき事ゐせじ神れ恩ゐくべ富ゐ何れ益ゐるや神ゐあがめたてまつるべきゐりとが往とゐろに神ゐいます神の御名をあがむべし神ゐ今日此にいます此にわれらが集れるゐ幸ゐり」是より ゐて其處ゐをりゐ人々おのくエリザベッの事をかたりいでゐ其感ずべき事等を互につげゐちせたり其處に二十巳下の浮氣の娘

をりたゞ深く感じたるごとく見えたり其女も神の恩によりてつひに信者となりたゝんとおもへる尋常の疎畧なる葬送と是とをくらべれば實に天地の違ありといふべし兩親の人々ゞ娘の事をはめてのたるを聞て少しく慰みたるおとくにて時々〻喜樂の顔を去めしたり左右するうちに早會堂にゆくべき時にもありぬれば我進よりて見をさめにエリザベッの顔をあゞめたり其顔をみれば種々〻と感ずべきとあろあり彼は笑あゞら世をさりぬ其樣あは顔にあらはる國風によりて花と葉をもて棺れ中をよろはひたれば宛然新郎をむうふる新婦ごとし我其花を見て天國の朽ざる花をおもひいだしぬ時わ我エリザベッの終の言をおもひおあし「死は勝にれされたり」といひて感をもよはせり斯て去づ〻と退ぞきたるゞ心わゝ「エリザベッわゞ

たふとむ友よ汝の記念とわゞ心わ平和あらんあとをねゞふ」とるゝへたり

小時ありて葬送の準備とゝのへければ我棺わさきだちて去づ去づとそゝめり此葬送ふ去たゞふ者は多くは熱心れ信者なりけれど尤たふとく思れたり棺の直後わゝ老父母涙をなゞしてろろくと歩みきたる其樣まてとわあれむべし親族ろの後わ去たゞひ朋友てれわつきてきたる一二丁も進みきたれる時人々〻挽歌をうたひたしむ之をきゝて眞わいふわいむれぬ樂き思をなせり我等ゞすぎゆく道は其景色いと美しく去て山の下ふありければ山響れわれらの歌わあたへて其葬送を吊ふ樣なぞまてとわ快くおもれたり又葬送の鍾あきらゝわきあえて一層感をまさ去めたり往く途わ數箇の村々をとはり去ゞ村人

皆禮をつくゝて之を吊ふ是みなエリザベツの德をおもひてなせる者とゝられたり誦歌は五分おきゝうたひたるゞわゞ之をきいて感じたる思想は筆ゝのべゞたし古い斯る風さうんゝゝゝとゝ聞たるゞ願くゝ今も之をさうんゝせんものゞ夫音樂い禮拜ゝはどよく用ふる時い大ゝゝ益ある者ゝり彼未來の復生の時ゝいたらゞ天の音樂ゝならず樂くきゝえわたるならんとおもはる

斯そゝみきて遂に會堂ゝいたりゝゝ目をあげてみるゝ墻壁に時計ゝゝふるゝりて西ゝゝたむく日の光其うへをてらせり其下をとはる時ゝ時のそぎゆく事と生命れさだまりなき事と死のちゝづく事をゝんゞへいだしゞピデのいひたるおとゝく「我等は先祖等とゝゝじく皆神のまへにゝりては逆旅の人ゝり寄寓

者なり我等の此世ゐながらふる生命い影のごとし一人ものてる
ものなしエホバよわれらの生命の日をこのゑふるゐとをゝゑへ
たまへ我等心を智慧のために用ひん」といへり斯て葬式れ文を
よみあげたるゐ皆心をもちひてきゝたり墓ゐいたりゑ時ゐエ
リザベツグ選ミおきたる讃美歌を歌へり而して遂ゐエリザベ
ツれ屍を土ゐ埋め後ゐあらず復生らんとおもひ望みて其處を
さりね斯彼は一時ゐの世をむゐをてゆきゑグ必ず復生の日に
は救主エスの右にをりて恩の徴とあらいるゝあらん貴賤貧富
にゐゝいらず之をよまるゝ人に申す君と我とは亦彼處にあら
いるゝあらんグ我等い謙遜を衣服主れ婚禮の服をまとひをる
や我等偶像をすてゝ眞の神につゐふるや我等ての身れ獣あら
ぬを知て救主の許にゆきて恩典をねグふや我等まゐとゐキリ

ストゐをりキリストゐよりキリストとゝもゐ生るや「我等は失てまた獲らき死てまた生たる者なるや」貧しき讀者よエリザベツは貧人の子にして貧しき女子なり是事ゐ於ては君はエリザベツに似るされど彼がキリストゐ似たるごとく君も似らるゝや

如何汝い信仰ゐ富る者といあられざるや君の冠は天ゐろゐへあるや君は天の富ゐ目をつけらるゝや若ゑからずは此傳を今一度よゝて神ゐ其恩を切ゐいのちをよ若君彼牛乳屋の女をすくひたまひし救主を愛して事へたてまつりゐば恩と平和と仁慈君にのぞむべし請ふ進んで神ゐつゝへよ君は今我とゝもゐ信者れ墓ゐゆけりされば君れ道をあゆみて終ゐまで及べれよ終ゐいたらば其報をうゝむるべし

○正誤

壹丁九行目　ひかされてい　ひらされず

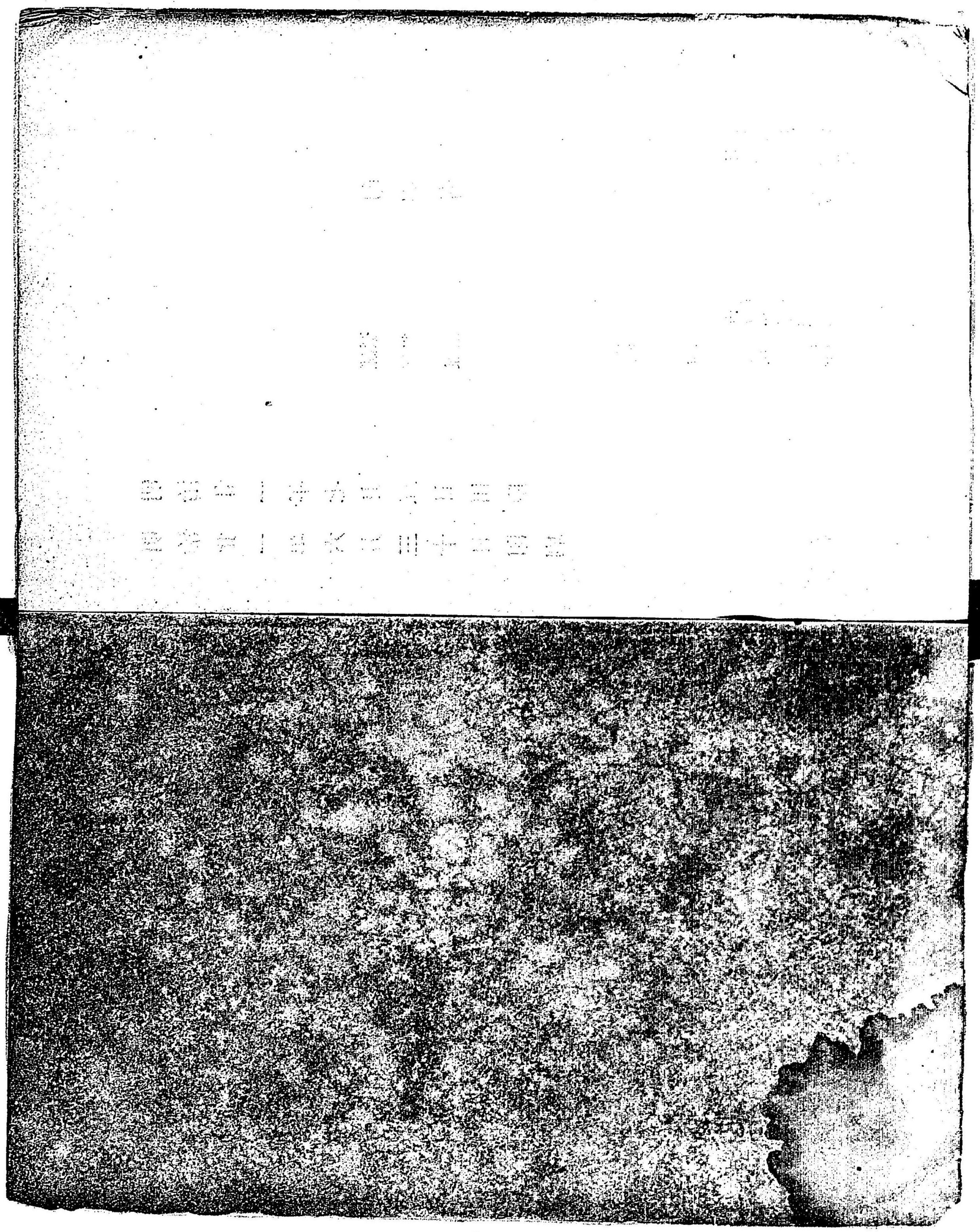
二丁十行目　某の處に　某の處の誤　以下倣之

其外本字假名等ノ誤ハ意味ニ害ナケレバ一々正誤セズ

明治廿一年六月三十日印刷
明治廿一年七月五日出版

譯兼發行者　高橋五郎　東京芝區葺手町拾八番地

印刷者　廣瀨安七　日本橋區兜町壹番地製紙分社



24
1
164

020282-000-7

特18-245

エリザベツ小伝

高橋　五郎/訳

M21

ABI-0088